
君の世界を守るコト -The Justice Sword Destiny-

斑鳩 灯涙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の世界を守るコト - The Justice Sword
Destiny -

【Nコード】

N8295B

【作者名】

斑鳩 灯涙

【あらすじ】

ある異世界に飛ばされた少年、雨笠零人。普通の世界と思ったがそこは女性だけの世界だった！？天人という名の悪魔との交戦を繰り広げる世界で零人が見た物は？最初で最後の男一人だけラブファンタジー新連載！

運命 - Destiny - (前書き)

注・この作品は東条 幸人様から受け継いだ作品です。
独断ではなく、ちゃんと交渉を致しました。
楽しんで頂ければ幸いです。

運命 - Destiny -

「……………ここは」

辺りを見渡す。パニック状態の頭では何も浮かばないが、取り合えず、自分の居た世界でない事が解る。

見渡す限りの住宅地や電柱が林の行列になっている。

「俺、ジャングルに来る夢でも見てんのか…？」

手を握って感触を確かめる。夢ではないとは理解しがたいが、納得できる自分の腕の力。

地面に手を着けて立ち上がる。草の感触に音。完璧に夢とは程遠いくらいしつかりとしている感覚。現実だと理解しようとするが頭が拒絶する。

「う…そだろ？」

自分の着ている服を見ても選んだ服。白と黒のラグラン。肩の部分から黒になっているのが目立つ。その上に赤いジャンパー。そして青いジーンパンに白いベルト、まるつきり変った所はない。

しかし、背景がvari過ぎていて。

後に振り向いても、前を見ても、同じく林。もう森と言った方が良いだろう。

空には見た事もない金色の鳥が飛び、そして森には生き物の鳴き声が響いている。光りは上にある太陽が頼り。届かない場所は文字通り真っ暗だ。

少年が見渡して状況を判断しようとした時、物音を立てて木陰に隠れていたそれは襲い掛かって来た。反射神経が鈍かったら、その一撃を避けられなかっただろう。

地面を砕き、草を飛ばし、木々を薙ぎ倒す。

「な…」

驚きの余り絶句する。前に居るのは顔がイノシシ、そして二足歩行で自分と同じ背の高さの化け物が槍を持って息を荒立たせている。

一撃避けたのもつかの間、もう一度振り被って槍を放つて来る。右に跳んで間一髪擦れ擦れで避ける事が出来た。体勢を立て直してもう一度化け物を凝視する。鎧を着けて槍を持ち二足歩行。有り得ない姿で足が震える。

冷汗が背中を流れ、服を濡らす。

対抗しても殺される。何しろあの体型で動きが速い。

「お前！ラノベ読者を舐めるな！こんなファンタジーな展開、普通は正義が勝つんだよ正義が！」

化け物を指差して叫ぶ。2時間で読める壮大なファンタジーを読んでもいれば普通だ。

例えば『灼眼の○ヤナ』とか『いぬ○みつ！』を読んでもいればこんな展開普通だ。何より主人公の待遇は向こうの方が凄く濃い。無論、イノシシの化け物は怯む所か更に息を荒立てている。

「ちい！逆効果！」

向いている方向を変えて全力で走り出す。倒れている木々や動物の死体を跳んで避け、スピードをなるべく落さず逃げ続ける。

何所まで走っても追い掛けて来る足音は消えない。逆に近くなっているような気もする。

「剣とか手から出ないのか！？ えーい、何でも良いからこの状況を逃げ延びる方法はないのかあゝ！！」

心臓が揺れる感覚。走り続けられるのも時間の問題だった。

突然、後頭部を激しく痛々しい衝撃と音が襲う。力が出なく痛みも感じない。

結論は直ぐに出た。化け物の持っていた槍が頭に当たった。それだけの事で少年の体から力も意思もなくなった。

それからどれだけ気絶していただろうか。

耳鳴りがする。だが、それより大きい刃の交差する激音。

「聞け！我が剣の咆哮！」

高く響く少女の声が響く。視線を向けると、青い胸までのジャケ

ツトと大きいベレー帽に全身のタイツを身に纏った正義が溢れんばかりの黒い瞳の少女が化け物に剣を振るった。

見事な上段からの振り下ろし。化け物の着けている鎧が弾け飛び、血も出ない。余りにも切れ味が良いのだろうか。それとも、化け物に血はないのだろうか。

肩までは伸びていない黒髪。少女には恐ろしく似合っていた。

剣を素早く腰にある鞘に収めると少年に駆け寄った彼女は顔を覗き込んで来た。

「おい！大丈夫か貴公！目を覚ませ！」

少女は少年の方を掴むと揺すり始める。ドンドンと少年の顔が青褪めて行く。

「ちょ…や、止めてくれ…死ぬ」

助けて貰ったのは嬉しいが死んでしまつては意味がない。

少女はホツと安堵で息を吐き出すと手を差し伸べて来た。自力で立てそうにない少年はその手に掴まる。まだ鼓動が収まらない。この手があの化け物を倒した。小さな包み込める手と華奢な体。正義感満ちている瞳があるが、桜色の唇に白い頬。きっと自分と同じくらしいの年なのだろう。

「済まない、大丈夫か？奇声が聞えてもしやと思つて着て見たのが正解だつたな」

助けられたのがよっぽど嬉しいのか、その顔には化け物と戦っていた時とは違う表情が浮かんでいた。可愛い、本気で思つてしまつた自分に頬を上気させる。

「いや、サンキュ。助かった」

「さんきゅ…？暗号か？」

自分の居た世界とは違う格好。剣など持っている自体不思議な話だ。綺麗に張り付いている黒いタイツは横に青いラインが入っているだけ。御洒落と言ったら青いジャケットと大きなベレー帽。

「え…いや、ありがとつて礼だ」

略した言葉は通じないが日本語は通じる。可笑しな話だ。

「それにしても、貴公は見慣れない服を着ているな」

その綺麗に澄んだ瞳を煌かせて剣士の少女は言った。服に興味があるのか少女は少年を興味深そうに見ている。少年が奇怪な行動を見ていると気付くと少女は咳き込んで少年に向き直った。

「人には名乗るのが情と言う物だな。わたしの名はレイチエル・カルマ。姫様直属の騎士団を率いている」

姫様と気になる単語を無視して少年は溜め息を吐いた。

「俺は…あまがさ雨笠。れいと雨笠 零人。零人が名前だ」

ここは、知らない世界。いきなり飛ばされていた世界そこで出会った少女、レイチエルも少し特徴的だった。ここは何所なのだろう？ 答えは返って来ない。

第1ページ：：颯爽の剣士（前書き）

プロローグから1話目に入りました！
誉めて誉めて〜！称えて称えて〜！
悪乗りのし過ぎですね。

第1ページ：：颯爽の剣士

一人の少女に助けられた。

その少女の瞳と髪は、まるで満月の夜空のような黒。見た事が無いと言っても良い程正義感に満ちた瞳に輝く剣。レイチエル・カルマ、彼女の名前。意味はよく解らない。それは自分も同じだ。零人と言ふ名前もよく解らない。

「それにしても、名前といい格好といい、見慣れない物ばかりだな」
彼女は不思議そうに零人を見ている。タイツと胸までのジャケットで言われたくないと思うがこちらの世界では零人の方が変なのだろう。

ただ、一緒に居て悪い気はしない。正反対だろう。

道は草原にある砂利の一本道。立て札や彼女の案内がなければとつくに迷っていただろう。

「その服は何と言う物なのだ？」

直ぐに彼女が指している物を赤いジャンバーだと悟る。

「ああ、ジャンバーって言つてな……貸すよ。結構ここ等辺暑いし」
零人は手を袖から抜いて前を全開にしていたジャンバーを脱いでレイチエルに渡す。

手に渡すとレイチエルは驚いた表情をした。

「貴公は身長が高いのに……これはそんなに重量がないのだな」

「ん？そりゃま、ナイロン製だからな。軽いのは素材が軽いからだ」

レイチエルは身長が少し高い。きっと160は行っているだろう。
零人の肩くらいの身長だ。

零人からジャンバーを渡されるとジャケットを彼女は脱ぐ。こう見ると胸が結構標準値ほどあり、健康的美体と言えるだろう。血が頭に上る感覚を感じて背を向ける。

「こ、こんな感じで良いのか？」

振り返って見ると案の定レイチエルが着てみるとぶかぶか。袖から手は出ないわ裾はまるでミニのロングコートっぽい。襟首なんて桜色の唇を隠してしまう。だが、それがまた良い。

零人は無心で近付くと袖の部分を手が出る程度に捲くり、ジッパ―を胸が隠れる所まで閉めた。流石に前が全開だと刺激が強い。

「名前は…レイトと言ったな？貴公はどうしてここへ着たのだ？」
ファンタジーが連鎖したと言っても通じないだろう。

異世界から飛ばされて来ましたなんて転校生に言われても流す自身が零人にはあった。

「いや、迷子です」

正直に間違いはない返答をする。

「では、王国に用があったと言う訳ではないと言う訳か」

ジャンバーの感覚を楽しんでいるのかレイチエルの表情は柔らかい。服やお洒落が好きなのは幾ら鈍感でも解る。

「ああ、そうそう………お、王国？」

つつい聞き流しそうになった単語を疑問文にする。

「王国と言ったらクレベルディアしかなかろう」

「クレベルディア？もしかして…お姫様とかが収めているあれですか？」

彼女は立ち止まると溜め息を吐いて胸に手を当てる。癖なのだろう。先程から繰り返している。

「それしかないであろう？」

空を見上げる。「ファンタジーだ…。ラノベなんて目じゃないファンタジーだ」と呟いてみる。

ロールプレイングだったらきつとお姫様に自分の事情を話して物語の序編へと行きたい所だが、そんな事したら本当にどうなるか解らない。きつと男の傭兵なんてわらわら出て来るのだろう、南無南無。

「そつだ。君って剣士なんだよね？男の傭兵部隊とかあるの？」

普通の事だが聞いて見る。女性だけ兵士なんて有り得ないにも程

自分の考えに気恥ずかしくなりながら零人は微笑み返した。

「じゃあ、頼めるかな？」

「承知した。貴公を安全に王都に連れて行こう」

彼女の笑みは、本当に破壊的な程綺麗だった。

第1ページ：：颯爽の剣士（後書き）

先ずプロフィールです。

雨笠 零人

高校2年生の17歳

好きな物・爽快する物や剣類

嫌いな物・テレビのカラーバー（もう見れない）

好きなタイプ・クールな不思議娘

嫌いなタイプ・ツンデレ

父母健在で妹が元の世界に居る。

元の世界に帰る事が目標。

結構男らしい所があつて勢いが着くと止まらない。

「ファンタジーだ」が口癖。

と言う訳で今回からが序盤！

輝け！

希望のJustice！

第2ページ：：大きな城壁（前書き）

流石に疲れる。

先の3話まで完成してますよ。

これから宜しく御願います。

第2ページ：：大きな城壁

少しずつ見え始める白い巨大な建物とそれを包み込もうとする城壁。間違いなく、城だった。

「うわ…すっげ」

見上げるほど高い城壁。きっと大砲でも安易に吹っ飛ばせないだろう。それより目を引くのが扉と思われる場所の中心に埋め込まれている石。あれは何なのだろう。

「レイト、どうかしたのか？」

レイチエルは城壁に着くと門番のような女性の傭兵に取り合い、零人の入国を許可してくれた。どれだけ難しい事かは解らないが説明に時間が掛かっていた。

「あ、サンキュ、レイチエル。助かった」

「良いのだ。そうだ、このじゃんばーとやらを返さねばな」

レイチエルがそう言うって赤いジャンバーを脱ごうとした時、零人は微笑んで止めた。

「良いよ、やる。ここまで案内してくれたお礼だ」

安かったから余りあげる事に躊躇いはなかった。何とバーゲンで1000円と言うお得な値段だったからだ。

彼女は少し戸惑っていたが直ぐに笑みになり「……ありがとう」と小さな声で言ってきた。

化け物を倒しても、他人の事を貴公と目下呼びしても、やっぱり心は純粋な少女なんだ。

「そうだ、こちらもお礼をしよう。道案内だけでは流石に申し訳ない」

少し考えるとレイチエルは白く巨大な城を指差した。

「城壁を過ぎて少し行けば城に着く。わたしと着いて来ぬか？貴公は信頼できる者だ。姫様も客人を粗末にしないお方。きっとお喜びになってくれる」

「い、良いのか？」

信用し易いと言うか騙し易いと言うか、騎士の精神はこんなんで大丈夫なのだろうか。

「ああ、わたしと貴公は…仲間だ」

少し恥ずかしがった後にレイチエルは俯いて言った。

可愛い、そう自然に思った。

「じゃあ、御願います」

レイチエルは零人の言葉を聞くと城壁の扉に手を当てる。するとその壁に填まっていた石が緑色に輝き始めた。少しずつ石から光りが回り、線が作られる。城下への城壁が少しずつ開いた。

「ようこそ、クレベルディアへ。歓迎するぞ、アマガサ・レイト」

ここから始まる、そんな気がした。それは目の前の彼女がそうさせたのか雰囲気がそうさせたのか解らない。だけど、心が騒ぐ。知らない世界に飛ばされて、その世界には女性が居なくて…ファンタジーだ。普通なら泣きたくなるほど心細いが、何故か不安や迷いはなかった。一步を踏み出して零人はレイチエルの差し出した手を握る。

「ああ、あながと」

ちよつと礼を言い、顔が赤くなっているのを隠した。

「どうだ、レイト。この城下は？」

何所までも続きそうな石畳。門を通ると直ぐ近くに『BATTLE』と縦看板に書かれた武器屋と『CURE』と書かれた薬局らしき店。住居や屋台が並び、女性達が賑わい、曲がり道があったりで実に長い。覚えているレイチエルを零人は感心した。

「その目の前の建物、それは《ギルド》だ。主に住民やその他の地域の村民からの要請が要求に答える事だ」

そこは五階ほどある建物。結構目立つ古いレンガ製だ。

「擁するに…万屋、ってか何でも屋か」

「ふむ、そんな物だろう」

レイチエルは零人に案内をしながら通行人を避けている。上手い。馴れと言う物だろうか。軽やかで一回も人とぶつかっていない。流石剣士だ。そう言う零人はこれで20回目丁度の人物と激突。今のもそうだが零人は男、女性とぶつかった位では倒れはしない。

目の前を見ると転んだ少女が呆然としていた。

緑、印象的な髪だった。綺麗なエメラルド、森とは対照的な明るいライトグリーン。

「だ、大丈夫……！」

その顔もまた、レイチエルに負けないほどの整いよう。幼いとは言い難い冷静沈着なイエローの輝く瞳に白と青主張の繋ぎでミニスカート。白い肌に白い服はピッタリだった。

「……………さい」

素早く立ち上がると少女は落してしまった赤い本を拾い、そのまま零人から離れて行った。

「ごめんなさいって言ったか、今？」

聞き逃しそうなほど小さい声だが、聞いていて悪くない鈴のような声だった。

「あれは……………」

気付くとレイチエルが零人と同じ方向を見ていた。人込みに混じって行った少女に。

「あの子がどうかしたか？」

「あ、いや、何でもないんだ。レイト、そろそろ城に行くぞ。時間も時間だ」

時間は解らないがまだ行くには早いと思う。そう言おうとしたが零人は黙った。

人には言いたくない事であるよな、うん。納得するには辛いがレイチエルはここまで大変な事をしてくれたし、恩返しだ。

「って引つ張るなよレイチエル！」

「貴公がぼうつとしているからだ。手を離すでないぞ」

彼女の笑顔に引かれて、足が勝手に歩き出す。

その時に気付く。あの子にあんまり引かれなかったのはこいつがタイプだったからなんだって。

第2ページ：：大きな城壁（後書き）

ええ、ちょっと辛い部分もありますが読んでくれてありがとうございます。御座います。

読者の皆様にはなんと感謝したら良い物が解らない程です。

現在、溜めている小説が25件と溜まりに溜まっているというこの状況。

いつ爆発するか解りません。

この作品は西条改め東条 幸人さんから受け継いだ作品で御座います。

元作は幸人さんの物と言う事で余り調子に乗らないように致していますw

まあ、この作品は少年小説と言っても過言では御座いませんね。

女の子だけの世界に飛ばされた少年。

元作を考えた幸人さんを私は尊敬してます。

よくこれだけのストーリーを考えてくれた！

これからは私が続けるので御贔屓を！

文字が間違っていたりするのは遠慮なく言っして下さい。直します。

そして、後書きまで読んでくれた皆様に再びお礼を。

それでは3ページ目でお会い出来る事を楽しみにしています。

輝け！希望のJustice！

第3ページ：：姫君ベレンス（前書き）

やっと第四話！

感想宜しく御願います！

第3ページ：：姫君ベレンス

石畳の道を歩いて行き、城が近くなってきたと同時にその有り得ない程の大きさが解ってくる。

「……おいおい、ここは中世のフランス王国か…？」

屋上と思える所にはその国のシンボルなのか風のマークが刻まれている。漫画やアニメとは迫力の桁が違う。

「ふらんす？なんだそれは」

「いや、気にするな。俺の所の小さな居酒屋の名前だ」

こつちもまた規模違い。

白いレンガに赤い先の尖った屋根。正しく王国。アメリカの大統領もビツクリだ。その城の入り口も大きく、見上げないと見えない。きつと冒険の勇者様物語はこんな場面から始まるのだろう。

「姫様専属第一番騎士団『ディア・ロイン』隊長、レイチエル・カルマ。只今帰還した」

隣りで零人を不思議そうに見ていたレイチエルが叫ぶ。すると、扉が開き、中から二人の傭兵が出て来た。大きな斧を担いでいるが、女性。つくづく自分の体力や腕力に自信がなくなってくる。

傭兵の二人はレイチエルを見ると頭を下げた。きつと地位と言う物はレイチエルの方が高いのだろう。会社かサラリーマンで言う係長と部長って所。王妃様が社長夫人って事になる訳だが、王様居ないし男自体居ないし。

「お疲れ様ですカルマ様！」

「…お前って偉いんだな」

零人は傭兵を見て呆然としながら呟いた。

「そうか？わたしの居る騎士団では当然だが」

流石に化け物との退治で怖がらない女の子の方が凄い。それに剣と槍のリーチの違いを物ともしない剣捌き。当たり前だろう。きつと俺なら彼女に一秒も経たずに殺されてしまう。

「あの、失礼ですがカルマ様。その服装は」

きつと零人のジャンバーの事だろう。ジャケットとタイツは動き安そうだが目に着く。

「ああ、これか。じゃんばーと言うらしくてな。その者に頂いた。わたしの友人だ。通してくれまいか？」

「はい。カルマ様のご要望なら安心出来るでしょうから」

それは俺の顔を見て信用出来ないと言っているのでしょうか？

レイチエルは「ありがとう」と礼を言って零人の手を握った。

「さあ、名誉な事だ。姫様に会わせてやろう。着いて来てくれ」

その人を誇りに思っているのかレイチエルの笑顔は絶えない。

「だから引つ張るなっ！」

そんな事をしながら門を通る。嫌と言っても引つ張ってくる手。

姫つて言つと高貴さ漂う感じを思い浮かべる。少しだけ姫を想像して頬を緩めながら零人は歩いて行った。

大きな窓。そこから漏れて来る眩しい光が背中を照らす。

「うゝん……ちょっと困りましたね」

王妃、つまり母が出ている時は国を守るのは姫の役目。ベレンスは木製のメイドが磨いた光る机の上に乗せられた書類を見て溜め息を漏らし掛けた。ざつと二百枚はある書類は見るだけでも体力を奪ってしまう。

子供の頃は姫になる事に憧れていた自分を思うと今の状況を見せ上げて欲なくなる。

白い二の腕までのホワイトグローブを着けて純白のドレスを着る。そして頭には王冠に見立てたカチューシャ。髪は王冠と同じように光る腰まで伸びた金髪。そして白い肌にルビー色の瞳。身長はさほどなく、腕も体も折れそうなほど華奢。彼女の名前はベレンス・レツト・レーゼ。クレベルディア王国を継ぐ23代目の姫だ。

「こんな時に……レイチエルが居てくれたら良いのですけど……」

古い時からの幼馴染。今では姫様としか呼んでくれないが昔はベレンスちゃんと呼んでいたって聞いていた仲だ。

正反対の性格で、ベレンスは内気でレイチエルと言う少女は有無を言わず一緒に遊んだ。今でも世間話や趣味話には笑顔で付き合ってくれる。心を本気で許せる少女だ。

だからこそ、余り危険な任務は負わせたくない。例えば今回は天^{エンジェ}人と呼ばれる人類の敵が破壊した国を探索して来て欲しいと言う物。何所に天人が潜んでいるか解らないし、敵は物凄く恐ろしい。だから辞めてと言ったのだが彼女は聞いてくれなかった。

「お母様…早く帰って来ないかな…」

寝ないで仕事をしていた14歳の体には負担が大きい。膨大な知識だけでは体は耐えられない。

現実逃避を諦めてもう一度羽ペンを手を持った時、体を駆け抜ける何かを感じて羽ペンが手から落ちた。羽が着いたのか地面に音は立たず、倒れている。

「これは……感じた事のない気配…。天人ではないようですけど、一度見回った方が良いかな」

椅子から立ち上がり机に目をやる。

「仕事は…ちゃんとしましょう。だけど…先ずはこの気配の方が先ですね」

白いハイヒールの歩く音が室内に響き、それと共に扉が開く音。

『やっと……我が主が辿り着いた…』

第3ページ：：姫君ベレンス（後書き）

読んでくれてありがとうございます！

いやゝ、第三ページ目！

話数で言うと4話目ですよ！

ここまで来て90人の読者数！

ありがとうございます！

これまでありがとうございます！

これからも宜しくお願い！

では第4ページで会いましょう！

輝け！希望のJustice！

第4ページ：：城内ストーカー（前書き）

ヤッホオオオ——！

狂った訳ではないですよ！

やっとなん百人です！

これから何卒宜しく御願います！

第4ページ：城内ストーカー

「姫様！こんな所でなにを――」

最後の言葉を言わずに傭兵の女性は床に倒れる。

「ごめんなさい。少して目が覚めますから」

何時もの手。城から脱走したりする為に覚えた催眠の呪文。手を翳して魔力を込めれば良いと言う簡単なものだった。

壺や剣、そして画が飾ってある細長い赤い廊下を歩く。窓ガラスには伝説の英雄と天人が戦っている画が一枚、そこに貼ってあった。城内を歩いて気配の後手を回る。

「…先回りをして、もし邪悪な者だったら…わたくしでは倒せませんものね」

勝てと言う方が無理といたい所。ベレンスのような華奢な体で化け物と対峙するのは不可能に近い。だからと言って魔法に長けている自分に今からレイチエルのように剣を振れと言われたら出来ないと答えるしかないだろう。

どの道…正面から敵と対峙するのは無理。だから魔法を死ぬ気で勉強した。一個中隊が倒せなかったゴーレムを撃ち碎いた事だつてある。魔法があれば負けない。後は詠唱時間だ。30秒の短い時間で中級魔法は放てる。だが、それまで敵は待つてくれない。

「守られてちゃ駄目ですよね…」

ゴーレムを倒した上級魔法も専属の騎士団が守ってくれなければ詠唱も無理だった。

もっと、自分に力があれば犠牲だつてなかった筈なのに。

「何に守られちゃ駄目なんだ？」

「はう！？」

突然後から声を掛けられる。気配が背後に居る。そしてもう一つの気配は見知った者だった。

「ひ、姫様！」レイチエル・カルマ。黒髪の綺麗な一つ上の幼馴染

と見知らぬ黒髪の人が立っていた。

レイチエルの顔は驚きの一色。もう一人の人物はポケットに手を入れて首を傾げている。

「お、お久し振りですレイチエル」

少し、後ろめたさがあつたベレンスは虜になるような笑顔を見せた。

零人はレイチエルの後を着いていたがいきなり彼女が手を零人の前に出して歩みを止めさせた。ぶかぶかのジャンパーで制されても余り迫力がないのは言うまでもない。

「どうした？」

「着けられている」

城内で着けられるとは油断も出来ないご時世だ。スパイか何かだろうか。

「聞き間違いなんじゃないのか？」

レイチエルのブーツが反応したと考えたが彼女は首を横に振る。城に入つてレイチエルが案内をしてくれていた。そんな感動もないもない時に敵が出て来たとなつちゃ、ストーリーも何もない。

「相手の背後に回る。着いて来てくれ」

レイチエルは傍にある英雄の描いてあるガラスに手を触れると目を閉じて呟いた。

「我が英雄の血よ。第二の英雄へ」

視界が歪み、白が混じる。ワープと言うやつだ。

「え？お前！ちょ、俺心の準備と言う物が——」

次の瞬きをした時には視界の背景が変わっていた。正直、船以外でこんなに足がふらふらとしたのは久し振りだった。

「もう絶対ワープ禁止——ってありゃ？」横を見ると純白のドレスを着た少女の後に回っているレイチエルを見付けた。

輝く金髪。腰まで伸びた髪を揺らして少女は今まで零人達が居た廊下の方向を見ていた。

「守られてちゃ、駄目ですよね……」

「何に守られちゃ駄目なんだ？」

「ひ、姫様！」

驚きの表情でレイチエルが口に手の平を当てる。

零人の肩にも満たない身長。正にチビツ娘、現代の転生。

「……姫様？」

レイチエルが尊敬していて憧れを抱いている人だと言うからてつきり身長の高い凛々しい剣士を想像していた零人は足元をすくわれる感覚を覚えた。

一瞬強張った少女の体が零人達の方を向く。美少女だ。流石姫様。

「お、お久し振りですレイチエル」

その声と表情は少年の心を鷲掴みにしたと言う。零人は腹部を抑えながら膝を着いた。

「どうしたレイト？」

レイチエルは零人が膝を着いて倒れそうになっている事に驚く。

「え！？ レイト！ 起きぬか！ 寝ずに失神など聞いた事もないぞ！」
史上初ですか？

「大丈夫だ。さっきの子の笑顔と声が頭の中に渦巻いてるだけ。俺に構わず先に行け……ジーン……」 某刑事ドラマの見過ぎです。

「何なのだ！ ジー。んとは！」

突っ込みも。の位置も完璧。パーフェクトウ！

レイチエルは零人の手を引いて無理矢理地面に立たせる。

「んでジャンバー、こちらのナイスガールは？」

「うむ、jee。んで良いか？ そうか。jee。ん、こちらの方はこのクレベルディア王国の姫様だ。……こんな事をしている場合ではない！ 姫様！ どうして城内を歩き回っているのですか！？」

レイチエルは姫様に聞き寄る。きつと部屋から出るだけでも危な

いんだろうな。

「逆に聞きますがレイチェル。何で貴方が許可のない人物を城内に入れているのですか？」

質問を質問で返す。えげつない攻防戦。

「それと、その服装はなんですか？そちらの方と同じように見慣れない服ですけど」

「あう……」

押されているレイチェルに少し口元を緩ませている姫様。
形勢逆転とは正にこの事。

「水に流しましょ？レイチェル。それと、そちらの方は？」

レイチェルの言葉を無視して零人に話し掛ける姫様。

「えっと、雨笠 零人です。零人が名前です」

「忍びの一族と同じ名前の組み方ですね。似合っていますよ、とても」

彼女の笑顔が僕の太陽。解るかも知れないあの臭い台詞。

「少しお話しをしましう。その服の事とか聞きたい事もありますし」

第4ページ…城内ストーカー（後書き）

どうだったでしょうか？

姫はか弱いって言うのは基本ですね、うん。

さて…瀬戸。花嫁でも見るか…。

第5ページ……貴方の正体（前書き）

やっと……やっと……260ヒット達成です〜！

ドンドンドン！パフパフパフ！

付きましては、皆さんの好きなヒロインのオリジナルのページを書きたいと思います！

1・誰と？

2・どんな姿？

3・場所は何所？

4・どんなシュチュレーションが良い？

かならず書かせて頂きますので、宜しくお願いです。

次回やその次に出るキャラでもやらせて頂きますので、それでは！

第5ページ：：貴方の正体

「貴方は…何者ですか？」

ベレンスは自分の部屋に零人とレイチエルを入れると、背の高い零人を見上げて言った。

この姫は俺が違う世界から着た事を知ってるのか？

レイチエルは訳が解らないという表情をしたまま首を傾げている。「服装もこの世界とは違う物。そして背の高さや顔の造りまで今まで見た事がありません」

女と男は違う。この世界に男は居ないし見た人も居ない。輪郭や背の高さについて言われても当然と言えば当然だろう。

だが、ベレンスの緋色の瞳は零人を映していた。険しく、正しく姫の名に相応しく。

「……聞きたい？」

もったいぶるように零人は微笑んだ。

ベレンスは早く話せと言いたそうな目をしている。目は口ほどに物を言うとはよく言った物だ。

「早く答えて下さい。さもなければ、姫の名に於いて貴方を罰せねばなりません」

手に持っていた杖を零人に突き出して大きな瞳を真剣に怖そうな表情に見せようとしている。

「俺は……男だ。この世界では伝説になっちゃってるらしいけどな」
ベレンスは呆れたように零人を見詰める。

当然と言えば当然。俺だって目の前の少女が『実は犬なんです、えへ』なんて言ったら有無を言わず叩き出すか、病院に連れて行くだろう。

「貴方、わたくしを馬鹿にしているのですか？」

「んじゃ、君達とは背も声色も、顔も違う俺をどうやって説明するんだ？」

見た限りでは、零人と同じほどの身長の子はいない。レイチエルと歩いていると結構服装もその他も目立っていた。レイチエルがいるから口を出さなかったのだろう。

ベレンスは零人を見詰めている。綺麗なルビー色の瞳が、自分一人に向けられているのは良いが、こんな状況じゃ嬉しさも半減。折角の美少女が台無しだ。だが、その威圧感は流石姫と思わせる物だった。

「……では、何故伝説の男性がこの世界にいるのです？」

質問を質問で返す。中々姫は出来るようだ。

「俺だつて解んねえよ。目を覚ましたら森の中でいきなり化け物に襲われて、そのレイチエルに助けられたんだ。この世界の秩序なんてしんねえし、知ろつて言われても無理。俺は俺だ」

「そこは、何所ですか？レイチエル」

「……はい、トレンドの森です」

やっぱり森には名前があるものなんだ。迷いの森なんて名前だったら洒落にならないが。

ベレンスは俯いて考える姿勢をとる。

「なら、こうしましょう。着て下さい、レイチエル」

「はい」

レイチエルは零人の話を呆然として聞いていたが、ベレンスに呼ばれると意識をはっきりとさせて歩み寄った。

ベレンスはレイチエルの前で猫招きのように姿勢を低くしてとジエスチャー。流石に立ったままではレイチエルの耳まで届かないのだろう。

零人はそんな二人を見ながら少し笑っていた。

「ええええ！？ わたしがですか！？」

レイチエルは上方お笑い芸人のように突っ込む。ベレンスがボケ——って言うのではないだろう。

「レイトさん、貴方を男性と認めましょう」

ベレンス姫は少し微笑をみせる。

「マジか！」

「その代わり、わたくし専属の剣士、レイチエルと戦って下さい。貴方がもし、勝てたら伝説の英雄と認めましょう」

隣りを見るとレイチエルが申し訳なさそうに俯いている。

「おう良いだろう——ってちよつと待て！レイチエルって一個大隊を率いてる剣士だろうが！勝てる訳ねえだろ！」

俺を助けようとしてくれた綺麗でクール（と言つか熱血漢）な美女。

稀にゲームである。仲間に居る時は物凄い頼りになる奴が寝返ると最強最悪の裏ボスになる。あればかりは設定上、戦い辛いし殺すのも辛い。主人公は情け容赦なく泣きながら殺すのだが。あれはまた、惨い。その後の裏切った奴の遺言（と言つか、主人公への暴露話と言つか）の長い事長い事。

しかも、それが現実に起こる。レイチエルは最強と言っに相応しい剣士だ。

『行くぜおらー！ツギやあああああ！』

ズビシュと言う効果音が出る事は確実に逃れられない。つか下手したら死ぬる。

無謀とは正にこの事。言えばファイナル・アンタジの主人公が1レベルの状態で裏ボスに挑むような物だ。きっと攻撃になる前に瞬殺。もし攻撃出来てもヒットポイントの減るゲージはお情け無の1だろう。ゲームは侮れんし現実も侮れない。

「大丈夫です。闘技場なら剣は斬れませんし、ただ当たると凄く痛いだけですから」

それは死ぬより辛いのでは？

某格闘ゲームのピヨピヨ状態がある物ならボコボコに殴ってピヨピヨした相手に必殺技をかますような物だ。酷過ぎる。

しかも下手したら斬られる方が絶対に良い。一瞬で痛みは終わる。姫は主人公に酷な事を言う。1万體以上いる敵の軍に単体で乗り込めとか、王妃が病気を拗らせて治すには伝説の薬草が必要だとか

言って主人公に泣き付いて取りに行かせたり…。稀には主人公に着いて行くと無茶を言う姫もいる。

……どう選択すれば良いよ。

このまま逃げ出しても良く宛ないし、かと言って最強のラスボス女剣士に単体で斬りかかると言うのも無理がある。こっちは剣の素人と言うか……このファンタジーな世界に馴れつつある自分が嫌になるのだが。

「さあ、どうします？」

ベレンスはきつと無理だと考えているのだろう。その笑顔が怖い。しかし、零人が言った言葉は意に反する物。

「やってやるよ！こちとらあのイノシシの化け物に殺されかけたような身だ！あの時亡くしたんだったら可愛い子に殺された方が良いでしょう！」

レイチエルは顔を上げて零人を見詰める。その黒い夜空のような瞳には迷いもなく、ただ真剣に一人の剣士を見る目で零人を見ていた。別人だ。

「……ならば、姫様の命だ。わたしも受けて立とう」

「では、コロッセオに行きましょうか」

第5ページ：：貴方の正体（後書き）

いやゝ、ホント！

ここまで着たかぁゝと言う感じです（笑

僕としては…というかまだヒロイン2人しか出てない訳ですがw

ツンデレの彼女が好きです。（次回ですね）

今回は、主人公とレイチェルとのバトル開始！？

お楽しみあれ！

輝け！運命のJustice！

第6ページ：：対・最強の剣士（前書き）

さあ、今日もアンケートから希望まで募集中！

レイチェルとベレンスの好きなシュチュレーションを送って下さい
！

第6ページ：：対・最強の剣士

ああ、これから俺は剣を持ったレイチエルという名の化け物（失礼）と戦うんだ。

まあ、未練はあるけど勝てる見込みもないし…某ギャルゲーでゴ―レムに立ち向かう主人公ってやつもあるじゃん。あれより一千倍は強いね、うん。

少し、王城内を歩く。2階にある姫の部屋…と言うか仕事部屋から5分弱くらいで着く。つか、2階がこんな高さなら屋上まで何階あるのだろう。思う限りでは80はきつと超えるだろう。

城内の少し右端と思える場所にそのコロッセオはあった。円形状の古代ローマを思わせる白い建物。ここが俺の墓場になるんだ…わあゝい…素直に喜べねえ。死ぬ事に喜んでどうするよ俺。

「レイディア・アーデイス・アーチ・レクシア」

ベレンスが何かを唱えると直ぐにその場から消える。

「え、え！ちよ、あの超絶ウルトラ金髪オムニバスは何所に消えたんだ！」（失礼です）

「姫様なら、あそこだ」

レイチエルが示す方向は観客席の一番見え易そうな王座席。いやあゝ！観客気分よあの子！

しかも、それだけなら未だしも客席満員。全員女性。

「え…え？」

零人は混乱しながらレイチエルを見る。

レイチエルは溜め息を漏らしながら「当然だ。貴公が男なんて言うから…今まで着た男と言う者は地位と名誉欲しさに溺れた女性だった。全で一撃で終わったがな」なんて事を言ってくれる。

「しかし、貴公は違う。姿と良い体と良い、剣士には逸材的な者だ。きつと観客は城下の者以上に剣士や傭兵が多数であろう」

確かめて見ると、確かに防具らしき物を着けた女性が大半。『き

レイチエルは美少女と言うよりは美女に近いかもしれない。まだ幼さは残るが綺麗な顔立ち。黒髪に黒い瞳。健康的な白い肌に……胸も結構ある。しかも最強の剣士。男がいなくて俺が女だったら確実に惚れているだろう。

直ぐにラッパ音と共に闘技場の中心へと入れられる。地面は土。もしコンクリートなんかだつたら洒落にならないもんな。

「これから、ベレンス様専属第一番騎士団『ディア・ロイン』隊長、レイチエル・カルマ対…法螺吹き——」

ブラウン色の髪のポニーテールが特徴的の魔女系ローブを着た挑発的な瞳の美少女。あ、目の色も茶色ね？

「待て！今これ↓……」の部分で法螺吹き死ねって言うのだろ！俺の心を読んだ上に文句と挑発的な言葉を言うかテメエ！」

レイチエルは……スネデレって言う感じか。拗ねたりデレたり。彼女になったら面白そうだなあ。

って違う！俺はこういう奴が苦手だ。ツンツンした生意気な女。絶対にお近付きにはなりたくねえな。こういう女に萌えとか言う奴の考えがよく解らん。

38

「はいはい、早く始めて早くやられちゃって。法螺吹きのアマガサ・レイト」

「へーいへいへいへーいへーい」

ちよつとりズムを入れて変事をする。

「さあ…バトル、開始！」

生意気な女は手を振り下ろすとその場から消え、観客席へと移動する。あいつ、魔法使いだな。

そんな事を零人が考えているとレイチエルの剣の突きが襲って来た。文字通り、紙一重で交わすと、零人は片手剣を薙ぎ払う。痛みだけなら傷付ける事はない。

「……………」

「なっ!?!」

避けられてからの俊敏なガード。一瞬、零人が自分の攻撃を避けた事を驚いていたようだが、そんな表情は一瞬で消える。

一発一発が剣を持つ手を震わせるような力強い振り。痛みで片目を閉じてしまう。

剣では向こうの方が段違いに上だ。構えて脚に力を入れて両手で防いだ筈なのに吹き飛ばされる。

「それが貴公の本気が…?」

挑発的な言葉も今の彼女には似合っている。剣先を地面に着けている。

「ちい、まだまだあああ——!!!!!!」

剣を思い切り振り振り、横に向かって右から左へ薙ぎ払う。

ギンツと音がすると零人の剣をレイチエルの剣が止めている。そんな…嘘だろ? 力負けしてるのか、俺。

「うおおおおお!!!!!!」

雑念を振り払う。集中しろ。今は目の前の彼女の剣を見詰めるんだ。

しかし、素人が剣を持った所でどうと言う事はない。段々と手と体に疲労が溜まって来る。

不味い…剣を振る事が辛くなって来た。

終わりとはこんなにも早い事なのだろうか。もう休みたい。駄目だ。無理。何で俺、こんな事してんだっけ？勝てる訳ない。こっちは素人。

欲求が押し寄せる。もう…駄目なのか？

レイチエルの剣が右手に当たり、剣が落ちる。きつと右手は折れている。痛みなんてないほどに。

左手で剣を掴み、ガードしようとするが、腹部に突きを食らい、立つ事も辛くなって来る。汗が額から顎まで流れ、地面に落ちて染みる。肋骨も持つて行かれた。血が口から漏れて来る。喧嘩は何回もした。けど、こんなに痛みはなかった。

左手に持った片手剣で防ぎながら後方へ下がって行く。

皆が皆、英雄じゃない。だから、英雄になった時、その事が自分の自信になるんだよ。

母さん…俺、もう無理だ。帰ろうって思ってたけど、やっぱり俺、ここで死ぬんだ。もう、後に退けない。

「俺は…戻るんだ！…はあ…母さんが…残ってる…家に…！」

だが、根気を込めても力は出ない。こんな時、英雄とか言われる奴ならどうするのだろう？

剣を呼び出してパワーアップ？無理無理。そんな都合の良い事出来る筈ない。

手に描いてあった文字が光り出す。ゼ。の使い魔じゃあるまい。

それどころか主人なんていないし。

ああ…呆気ねえ。情けない。

零人の体にレイチエルの剣の斬り下ろしがヒットする。

「があ！」

痛いどころの話じゃない。零人は苦痛で汗を流しながら剣が当たった部分を抑える。もうヤバイ。

「済まん、レイト」

声が薄れ薄れ聞える。こんな所で終わるか？

レイチエルの剣を見る。あの剣と…レイチエルの剣技があれば…
対抗できるのだろうか？この状況を引っ繰り返せるだろうか？俺に…
あの剣と知識を造れないだろうか？

最後の力を振り絞って地面に手を着く。もう立つ事も無理だろう。
もう、ファンタジーでもなんでも良い。戦う事の出来る…この状
況を引っ繰り返す力を。

『想像の主。願い、聞き入れた』

第6ページ：…対・最強の剣士（後書き）

やっと400ヒット突入！

いや、もう一時は読者数が極端に少なくどうしたものかと思いましたがw

さて、レイチエルは敵と判断した者には容赦ないですねw

今回は零人の逆転！？

輝け！希望のJustice！

第7ページ：：激闘の末に（前書き）

さあ、やって来たぜ埼玉埼玉！（↑生まれも育ちも八王子）

これからヒートアップさせましょう！

それから、やっと600台超えそうです！

ありがとうございます！

第7ページ……激闘の末に

手の平が輝く。握り締めると光りが漏れて……湧き出る水のように輝き出す。

レイチエルは驚いたのかバックステップで二、三步飛び退く。

これは……暖かい力。冷たい物じゃなく、人を包み込む優しい光。手の平から溢れる光は……想像の力。だけど、想像だけでは何も造れない。レイチエルと彼女の剣を見る。あれだ。零人は手を握り締めた。

体の奥から湧き出すような力。その力が右手に集まって行く。

この剣をこう名付けよう。レイチエルの剣の知識を集めた剣。だけど、レイチエルの剣とは違う剣。

「はあ……これは……俺の剣、……エクシール」

現れる新しい剣。その剣は背中腰に鞘と共に現れた。

解る、この剣は長くはこの世界にいられない。この世にない物だから。

勝つたら……レイチエルかベレンス姫に剣でも貰うか。

激しく高鳴る鼓動。背中腰の剣のグリップを掴んで鞘からゆつくりと抜く。体が結構動く。左手でしか剣は掴めないが、折れた事を感じさせない体。まだ行けると自分に伝えているようだ。

「まだ……終われないな」

口元を緩ませる体力は残っている。太刀打ちできないかもしれない。けど、やれる所までやる。

喧嘩は強い奴に売れて母さんの口癖だったっけ。レイチエルは強い。ここなら傷付ける心配はない。なあくに、大丈夫だ。俺の体の骨が全部折れたってきつと魔法でちよちよいと治せるだろう。

剣を構えて体勢を立て直す。右利きの手が使えないのは流石に苦だが、それを左手でカバーすれば良い。だけど……何時まで持つてくれるか解らない。だって剣を持った手が震えまくってるから。だから

ら…早く終わらせるしか道がない。

レイチェルの姿が一瞬だけ視界から消える。

零人は反射的に前に剣を振った。考え通り、剣はレイチェルの刃と接触する。

「な…に…？」

きつと必殺技かその他だったのだろう。受けられた事を驚いているようだ。

確かに今の零人でなければ瞬殺。きつとレイチェルの振り下ろした剣が肋骨の残り十一本くらい軽く持つて行っていただろう。受け止めた剣の力強さがそれを感じさせる。

「この力…そうか…貴公、面白い事をしてくれる」

レイチェルはバックステップで退くと剣を真正面に地面と垂直で構えた。

「貴公の持つている剣。それは姫様の家宝エクシールの映し剣だ。姫様がお前に持たせたのだろう。その剣は…持つて後3分と言った所か」

真剣な顔が更に増す。美しい瞳が零人の姿だけを映している。レイチェルは剣を突きを繰り出すように構えると一気に間合いを詰めて来る。

「ならば…その剣が消える前に決着を着けてくれよう！聞け！我が剣の咆哮！」

この言葉のフレーズに零人は記憶があった。

イノシシの化け物を倒した時に言ったフレーズ。とすると来るのは上段からの真っ直ぐな斬り下ろしだ。レイチェルの性格を考えると当たりだろう。

「ブレイヴ・レイデット！」

紫色の光りを佩びた真っ直ぐな上段からの振り下ろし。これに對抗するのは無理だ。

避ける、今はそれだけしか浮かばない。姿勢をひくくし、スピードを上げる。足は悲鳴を上げる。だけどここで頑張らなくてどうす

る。石の破片が服を切り裂く。よく見るとレイチエルに譲った赤いジャンバーも少し切れていた。

目に石の破片の一分が当たり開けなくなる。だが、ここで痛いなんて言えない。

この技を避けた今だけが最後のチャンスだ。この最強の剣士に勝てる確率なんて、この瞬間を逃せばない。ありがとう、その言葉を剣に乗せて、左手に持った剣を振り上げる。

「これで、最後だあああああ！！！！！！」

渾身の力でレイチエルの背中に剣を振る。

そこで――零人の意識は切れた。

「ね、ねえ……もしかして……あの男が勝ったの？」

「もしかして……本物の男なのかしら？」

観客やベレンスは目を疑った。流石にハンデが過ぎたのだろうか。レイチエルの倒れる姿。そして、倒した零人と言う者も地面に転がる。

挑戦者が勝った。だが、その理由は解っていた。家宝の剣の映し剣とは言え、あれを呼び出す事の出来る者がいる。それは間違いなく……伝説。

『わああああああ……！！！！！！！！！！』

観客席が煩いと思えるほどの喝采に包まれる。

ベレンスはレイチエルの方を心配していた。

「レイチエルと零人さんを医務室へ！即急に応急手当を！」

ベレンスが言うのと動き出す呆然としていた看護魔法班。あの人は……伝説の戦士、男。認めざる負えない。あの剣――家宝のエクシールは男が使っていた剣と言われているから。

「……エイン、あの剣を用意していて下さい」

試合開始前まで零人と言い争っていた茶髪ポニーテール少女が挑発的な瞳を閉じて片膝を床に着けて頭を下げる。そして、そのま

まその姿は消える。

「…あの剣は男性にこそ相応しいと聞いていましたものね」
その顔には少しだけ笑顔が宿っていた。

第7ページ：：激闘の末に（後書き）

ええ、このような展開です（挨拶）

作者としては頑張ったつもりなのですが。

前も言いましたが僕はエインが大好きです。

だからってヒロインをエインに出来ないのが厳しい！

ツンデレって言うんですかね？

これからも宜しく御願います！

輝け！希望のJustice！

第8ページ：…その名はインチキ魔法使い（前書き）

やっとエイン登場！

口が悪いけど許してやって下さいw

さて、好きなシュチュレーションも受付中ですw

メールで一通到着しました。

レイチエルの水着姿で海でイチャイチャという物です。

今回は普通ですが、その次にはUPしますのでw

第8ページ：その名はインチキ魔法使い

頭を感じる優しい暖かさ。柔らかくて優しい匂いがする。

「母…さん」

母さんの香りに似ている。香水とか使わなくて、気取らなくて、優しい母さんの匂いが。

「レイト、起きたか？」

撫でられていると言った方が良さのだろうか。安心する。薬品臭いこの部屋で—— 霊安室？

「つてあつてたまるかああ——！！！！」

勢いをつけて布団から出る。白いシーツにベッド。ここは——保健室に近いだろうか？ だけど、そこは広くて、何人でも入れられるように造られた部屋のような感じがした。薬品臭い匂いは棚に置いてある薬の瓶のせいだろう。

「レ、レイト！？ 済まなかった！ 頭に入れた気はなかったのだが！」

「いや、ここが墓場かと一瞬思ったただけだから」

突っ込みと失礼な点を指摘。こいつから懐かしい匂いがしたのは何故だろうと考えたが、何も浮かんでこない。

レイチェルの顔を見ていると思い出す戦闘時。

「そ、そっぴや、俺、お前に勝ったのか？」

体の痛みもなく、完璧に治っている体で助かった。もし傷が残っていてあんなリアクションをしていたら傷口が開くどころの話じゃない。服も破けていた筈なのに痕もなく消えている。流石魔法。^{マジック}

「その、やはり貴公は… 男なのだな」

レイチェルは恥ずかしそうに手を動かしている。く、くそ、怒ろうにも怒れねえじゃねえか。

「やっと解ってくれたか」

笑みを出せるようになった表情で零人はレイチェルを見詰めた。

剣を持った時のりんとした美しい顔も良いが、やっぱりレイチエルはこうやって傍にいてくれて恥ずかしがっている彼女という方が合っているように思える。

男と理解してくれたって事は、遠回しに勝ったって事だ。喜びで頭が一杯になる。

「レイト、貴公は強かつ——へう!？」

「やったああああ!これで法螺吹きって言われないで済むぞ畜生めえ!」

レイチエルを抱き締めて喜びを噛み締める。神様ありがとう。俺は元の世界に帰ったら近くの教会で貴方を一日1時間は崇めます! 髪の毛の匂いが漂い、汗とシャンプーが混じったような香りが鼻に伝わる。

女の子の抱き心地ってこんな感じなんだなと零人は涙を流し掛けた。

「レ、レイト……」

どうやらこのドジッ娘剣士には赤面症があるみたいだ。見事に真っ赤。

「俺さ! やつと男って言われるんだよな! 女って思われるのは真っ平だ! やったぜレイチエル!」

「あう……」

零人は問答無用でレイチエルを抱き締めた。やっぱりあのツンデレよりレイチエルの方が万倍マシ! スネデレ最高!

「法螺吹きレイト……ってレイチエル様になにをしてるのよ!」

この覚えのある声。挑発的暴言にツンツンした声色。法螺吹きと言っこの世界にはなさそうな単語を使う奴はあいつしかいない!

零人は少し放心状態のレイチエルをベッドに座らせると振り向いた。

案の定、オレンジ色のリボンに黒い黒い(まるで腹黒さを表しているような)裾に黄色のふりふりが着いたローブを羽織り、ミニスカートに黒いニーソックスを履いて白と赤主張の服を着たポニーテ

ールツンツン娘が零人をこれでもかと犯罪者を見る目付きで睨んでいた。くわばらくわばら。

「なんだこのツンツン娘！感動に浸ってる時に現れやがって！」

【ツンツン娘】「煩いド変態！レイチエル様から離れなさい！」

【ド変態】「にゃにおおおお？デレなしポニーテールに言われたくねえな！」

【デレなしポニーテール】「何よデレって！訳のわかんない単語を並べて逃げれると思うか変質者！」

【変質者】「テメエ！言わせておけばインチキ魔法使い！」

【インチキ魔法使い】「煩いわね強。魔！早くその汚らしい体をレイチエル様から退けなさい！」

【強。魔で汚らしい人物】「お前、女としてのプライドないのか！この下ネタマジック！てか、何で女しくない世界でお前がそのフリーズを知ってるんだ！」

【下ネタマジック】「煩いわね！目障りな微生物！あんななんか女の敵よ！」

【女の敵の目障り微生物】「ぐはあ！テメエ！お前なんてキャバクラ嬢になれば良いんだ！」

【将来のキャバクラ嬢】「煩いわね変態！あんななんて雑魚に食われる雑魚よ！雑魚め！」

「ぐはあ……」

決戦決着。悪口対決はツンツン娘の勝利で終わった。くそお、あそこまで追い込まれるとは……。

「レイチエル様、あのアホに何かされましたか！？ 何かされたならわたしがあいつを魔法でこの世から——」

聞き捨てならない単語を吐くツンツン娘。そっぴやあいつって名前なんだろう？

見る所容姿だけはかなり良い線。レイチエルと合わせても絵になる。背中の中分くらいまである茶髪のポニーテールはオレンジのりボンで結ばれている。悪い点は俺を見る目付きとツンツンした性格あと口の悪だ。

「んで、何だ？ ツンツンマジシャン」

あだ名決定ツンツンマジシャン。

「不愉快なんだけど、あんたを姫様に連れて来いって言われたのよ。解ったわね変態下衆」

不愉快はこつちだと言いたかったがこれ以上治療室でツンツンマジシャンと言いつつ訳にはいかない。きつと患者さんは見えないだけにいるのだろう。

目の前の女は手に填めたグローブをきつく締めている。

「解った、行こうじゃないか。その前にツンツンマジシャン、お前の名前を教える。この名前言い難い」

「だったら言わなければ良いじゃない」

腕を組み、零人に挑発的な態度を取る少女。これが噂のツンデレのツンの部分なら良いのだが。

魔法少女はローブをはためかせて扉の前に歩いて行く。

「……エイン・ディ・パール、あたしの名前よ。将来、大魔法使いになる者。覚えときなさい」

第8ページ：…その名はインチキ魔法使い（後書き）

零人「……………」

な、なんでしょう？

零人「女の作者がこんなの書くとはな」

良いじゃないですか！男女差別反対〜！

零人「まあ、それとして、質問コーナーだな」

えと、零人くんの家族は？

零人「母さんと俺の二人」

趣味は？

零人「…料理」

口癖は？

零人「ここに着てからファンタジーだって言葉が多くなったな」

では、ここら辺でw

零人「ちよつと待て——！」

今回は、ベレンスと零人の物物交換？

輝け！希望のJustice！

第9ページ：…受け継ぐ物と渡す物（前書き）

1000ヒット突入です！

感想がまだ三件しか着ていないのが辛いですが…（涙）

感想をくれた黒鉄 翼さん、Qさん、NO1さん、有難う御座います！

第9ページ：：受け継ぐ物と渡す物

インチキ魔法使いに案内されて行くのは、やはり姫の仕事部屋。溜め息を漏らすしか出来る事がない。もしかしたらレイチエルを倒したから死刑とか言われるかもしれない。流石に零人も100人以上の傭兵相手に正義のヒーロー系で突っ込む勇氣はない。抹殺とはこの事。きつと一国の姫なんて言ったら人を一人くらい抹殺するのは命令一つだけでOKだろう。

「：：地面に埋められるのか：：」

葬式しないで生き埋めなんて言ったら殺された方がマシだ。絶対。エインって言ったつけ？この魔法使い。確かにワープはしてたな：：。

赤い絨毯が敷いてある廊下を歩くのは始めて。きつと昔の貴族とかは全員こんなだったんだろうな。本当に身分が激しい。しかも見渡す限りの壺や絵や剣。ここは歴史博物館なんなか？

レイチエルは着いて行くといい張ったが、医務室でもう少し寝ていてくれと言っておいた。これじゃあ剣士と言うよりか懐いた犬じゃないか。

階段の場所に着く。あ、ここを上れば俺は殺^とられる。きつと殺られる。絶対殺られる。

「着いたわよ、ちゃんと礼儀正しくね」

目の前には上流階級の部屋と思えるくらい豪華な扉：：と思ったが木製の普通の扉。そっぴやレイチエルと来たな一回。ついでに鎧を着た、強そうな女門番が四人。これを力で突破しよう物なら殺される事請け合いだろう。あのデッカイ斧で上からサッパリといかれる。エインは零人が姫に会う事が気に入らないようだ。だからって無言で威圧するのともうかと思う。魔法少女じゃなくて魔女類だなこいつ。

「エイン・デイ・パール、客人のアマガサ・レイトを連れて来たわ」

傭兵は「証をお見せ下さい」とエインに丁重に言った。

エインがローブを前で留めている石を翳す。すると目の前に現れた訳の解らない文字と空間のバーチャル。おお、最先端。

傭兵はそれを見るとレイチエルとは違った態度で扉を3回ノックして、声が聞えると扉を開けた。

どうやら、エインはレイチエルより階級が低いようだ。ツンデレとスネデレの違いだな。

そっぴいやクラスに居たっけ。俺に余計に突っ掛かって来る奴。煩かったなあ…。

「早く入りなさいレイト（馬鹿）」

「分ってるつうの！（如何様マジック）」

でも、こういう奴、だいつ嫌いだけど…暖かいよな。

「ようこそ、レイトさん」

態度は会った時と変わらない。だけど、その笑顔には少し受け入れてくれた感じがした。

「ようやく、俺を男だっと思ってくれたんですか？」

零人は苦笑しながらベレンスに言った。礼儀正しくしているつもりだが、相手にはどう見えてるか解らない。エインはベレンスの前だから何時ものキレを見せない。人によって態度使い分けてやるぞ。

「ええ、正直に言うと、貴方を疑っていました」

そっだろっ。きつと世界で始めての男だと証明できたら名誉や地位なんて楽だろう。

「今まで何人来たんですか？男って言うってレイチエルに負けた奴」

「さあ、数え切れませんね。腕自慢でも、レイチエルには勝てませんから」

きつと自分は運で勝てたに違いない。零人は背中に嫌な汗が伝うのを感じた。

「でも、貴方はレイチエルに勝ちました。それに、その服や背。顔

立ちも今まで来た人達とは違います。それに、今気付きましたけど、貴方は真っ直ぐな瞳をしております。まるで…そう、レイチエルのような」

ベレンスは零人の瞳を覗き込んで言った。

こんな子に結婚してなんて言われた日にゃあ、きつと二言でOKだろう。主人公は嫌がるが当然だが、そんな奴等に言ってやりたい。俺の前の少女は姫だああ——！と。

その身振りだけで零人はベレンスの命でレイチエルと戦わされた事を許してしまいそうになった。

「でも、本当にごめんなさい。レイチエルがあんなに人と真剣に戦う姿、久し振りに見ましたわ。それに痛かったですよ？」

「ごめんなさいって…反則。これで怒れと言う方がどうかしてる。いい、いえ、大丈夫。つとそれと……それだけで俺が男って証明できないと思いますんで…これ、読んで見て下さい」

零人は背中に入れておいた本をベレンスに渡す。こちらの人でも読めるのだろうかと思ったが、無理だろう。零人が見た文字は解らない英単語のようだった。

「えっと…これは？」

「うんうん、男の夢だ。エッ。小説と言ってだな、それはもう、男の夢ばかりが載っている小説だよ。…ってこっじゃ本って言った方が良いか。所々に描写……ってカリアルな絵が載ってるからそれだけ見てくれれば良ですよ」

文庫本を受け取ったベレンスは表紙のチアガール姿の女の子を見ている。うーん…まあこっちにいるだけで夢見てるみたいな感じだし、小説も要らないかな。

「この服装は？」

「男に夢を与える正装だ。なあくに、気にする事はないですよ」

零人はベレンスに本の内容を手短に説明すると暇な時にでも見たと笑顔で言った。

「でも、偶然ですね。わたくしも渡したい物があるんです」

ベレンスは小説を大事そうに抱えると（その情景だけで鼻血が出そうになるが）後の嚴重に保管されている宝箱のような物を開けた。一つの小さなステッキのようだった。青く輝くグリップ。それ以外には鍔の部分の横に伸びた穴。菱形の縦に伸びた形の鍔と少し小さくなった柄の頭。

「そのグリップを握り、想って下さい。貴方の出したい刃を」

出したい…刃。そりややっぱ、普通の剣のような形の刃が――、
「なっ!？」驚きで顔が引き攣る。刃が鍔から形を現した。そして、その刃は透けていて、まるで宝石のような薄緑色の刃だった。

「その剣は…やっぱり貴方を選んだんですね。やっぱり貴方は初の男性。この本で証明して頂かなくても…それは解りますよ」

そう言って剣の刃からベレンスは顔を上げた。

「このエクシールを…貰って頂けませんか？レイトさん」

第9ページ：…受け継ぐ物と渡す物（後書き）

いやゝ、やっとプロローグ合わせて10話目。
今日はゲストにレイチエル・カルマさんを及び致しましたゝ。はい拍手ゝ。

レイチエル「まあ、呼ばれたからには、ちゃんとやろう」

ええゝ、わたしの友達からの質問なんですけど、レイチエルさんの身長、スリーサイズを教えてくださいだそうです。

レイチエル「まあ…恥ずかしがる事ではないな。

身長・161

バスト・85

ウエスト・58

ヒップ・81

だな」

平均より結構良い体型をしていて…羨ましいゝ。

レイチエル「へ？」

ええゝ、次です。

レイチエルさんの趣味は？

レイチエル「……料理…だな」

まあ、まだ出てないんですがね。

この話しも何時か載せようと思ってます。

レイチェル「今回は、レイトの……ほーむ、しっく？」

次回も楽しみにしてて下さい！

輝け！希望のJustice！

第10ページ…君と夕日と…（前書き）

ええー特別偏書き終えましたが…

今の段階で出せない話題が多い！（ネタバレ注意報）

と、言う訳で、次話の次話にUPします！

リクエストを無下にするようですいません！

第10ページ…君と夕日と…

零人は満足げに赤い絨毯の廊下を歩いていった。背中腰にはベルトに繋がれたエクシールのグリップ。刃は出したい時に出せると聞いた。便利な世の中だ。

それに一番嬉しかった事は姫に男だつて認められた事だ。エインは不機嫌そうに見ていたが、認めて貰う事がこんなにも嬉しい事だとは気付かなかった。元の世界では、認められるなんて母さんにしかして貰えなかった。

もう親父とも言いたくないクソが死んでから…他の奴から見られる哀れみの視線。

母さんは、何も出来ない俺を一生懸命育ててくれた。誇りに思える母さんだ。

「母さんの為にも、早く帰ってバイトしねえと！」

休みの日はバイトで一日を費やしていた。

新聞配達、コンビニ店員、レンタルビデオ屋の店員に酒場の酒運びまで。苦労はしていたけど…母さんを養う為なら良かった。女の子と遊ぶなんて出来なかったし、友達も一人も出来なかった。けど…母さんが笑ってくれるなら、何時でも頑張れた。

異世界で遊んでる暇なんてないんだ。早く、帰らないと。

窓から夕日になっている日を見詰める。鳥が飛び、そして…城下町を行き交う人々が少し見えた。まだ町は活気だっている。見ていて自然と羨ましくなってきた。そういや…祭りに行ったのって最後何時だったけ？

絨毯の上を歩く足を止める。窓に手を当て、少し眺めた。そこで家に入って行く人を見て唐突に夜の事を考える。そういや…俺…何所で寝るんだ？苦笑をして頭を搔く。

「あれ…もしかして伝説の男の方じゃないの？」

「わたし知ってる。レイチェル様を倒したって」

「レイチエル様が足を滑らせたって聞いたよ？」

面白い事を言ってくれているメイド三人組。

でも、普通にやればレイチエル勝ちは確定的だった。骨なんてバキ折れてたし、血だって吐いてた。あれ以上続いてれば完璧にやられていただろう。

寒気を覚えた零人はメイド達の前を通り過ぎ、寝れる場所を探そうと一階へ下りる階段へ向かった。

「うわ、すっげー」

城内を滅茶苦茶に歩き回っていると着いた場所。

それは、ブロック形の庭木を何個も並べ、噴出す噴水が幻想的な場所だった。手身近な場所にあるベンチに腰掛ける。

「……どうするかぁ」

ベンチに寝転んで零人は呟いた。

姫、ベレンスに寢床を用意してくれないかと聞き忘れたのを今頃思い出してどうすると自分に突っ込みたくなる。

夕日になった朱空。赤くなる噴水の水。幻想的だ。

中央広場と言うのもちよつとあれと思えるほど広いここはドームのように円形形になっているらしく、ベンチも確かに円形で噴水を囲むように並んでいる。どんな趣味なのだろう。

「帰りたいにも帰れないし…バイト、店長怒り狂ってるだろうなぁ」
空を見上げながら呟く。口にも聞える声にも元気がなくなってきた。

「…ホームシックってやつか」

知らない世界に知らない人々。馴れると言われたらきつと逃げ出すだろう。それも許されない状況になるとは思ってもみなかった。

運命の悪戯か…はたまた悪い夢か。夢なら覚めて欲しい。だけど、覚めて欲しくないと思っている自分がいる。バイトをしなくちゃいけない。母さんを養わなきゃ駄目だ。あの人は世間で辛い思いをしても自分の息子だけは一生懸命捨てないで育ててくれた心の強い人

だ。もし、死んだ母さんを捨てた男に会えるなら、貰ったエクシールで迷わず刺して殺しているだろう。

影が少しだけばやけてくる。もう夕方。夜は近い。

月は……見えるだろうか？ただそんな事を思いながら、レイチエルとの戦いで疲れた体を癒そうと、零人は目を閉じた。夢なら……覚めてくれと願う気持ちは……少しで消えた。

「……レイト？」

零人に医務室で寝ていてくれと言われて、ずっと静かに布団を被っていたが、もう夜も近くて、レイチエルは城の自室に戻ろうとしていた。

だけど、その途中で一人の見なれない服を着た背の高い人物を見付けた。あれは、レイトだ。

背中腰のベルトに青いスティックを入れて歩いている零人をレイチエルは追い駆ける。何所に行くのだろうか？とその気持ちが先走って何回もばれそうになったが、幸い、零人はどれも見間違いと思いついて入った。出来れば見付けて欲しい気持ちもあるが、なんだか気恥ずかしかった。

白い柱が支えている屋根の廊下を歩き、大きな城内を歩いて行く。しかし、辿り着いて驚いた。お気に入りの場所の中央広場だ。花が咲いていて鳥がよく来る場所に、何をしに着たのだろうか？

零人は無言でベンチに座り込むと倒れるように寝転んだ。

一瞬、零人が倒れたと勘違いして叫びそうになったレイチエルは口を自分で抑えながらブロック形の庭木に隠れる。

「……ホームシックってやつか」

ほーむしっく？聞き慣れない単語ばかりの零人の言葉はレイチエルの頭を混乱させる。

今、レイチエルが着ているジャンパーも零人が渡した物。あの本はなんなのだろう？と今でも思うが、あれはレイトの持ち物だと自

分に言い聞かせる。少しだけ顔が赤くなつて頭を横に振る。

何故か寂しい感じがした。零人は異世界の住民。長くはここに居られない。だけど、何故か帰って欲しくないと思う気持ちが自分の中で膨れ上がって行く。何か、胸の辺りが暖かい。話し掛けなきゃ、この熱さは収まらない。

ジャンバーの裾を握って立ち上がる。何で人に話し掛けるだけでこんなにも照れるのだろうか？今まで、話し掛けようとしても人にこんな感情を感じる事はなかった。男なんて、何がなんだか解らない。だけど、レイトは自分に似ていて…何故か気を許してしまう。

「レ、レイト？」

近付いて行き、レイチエルは零人に声をかけた。しかし、反応せず耳に入るいびき。寝ている。

「ふふ…緊張したわたしが馬鹿みたいじゃないか」

口元に手を当てて静かに笑う。起こすには惜しい寝顔だ。

男と言われても、余り解らないし見た事なかった者だ。雰囲気や体付きも違う。だけど、やっぱり寝顔は幼いような気がした。

少し勇気を出して、前髪を撫でてみる。サラサラした自分と同じような髪。子供を触っている様だった。

「…かあ…さん」

目元から少しだけ溢れる零人の涙。レイチエルは、その涙の意味がよく解らなかったが、その涙を人差し指で拭いてやる。

「……仕方ないな」

記憶に余りない母のやつてくれた事をやってみる事にする。ベンチに座り、零人の頭を上げたレイチエルは自分の膝をそこに滑り込ませた。膝枕と聞いた。やる側も安心する。まさか、この年で自分がやるとは思わなかった。頭を撫でて少し笑顔になった零人の顔を見て、レイチエルは微笑んだ。

「わたしは…貴公の…いや、貴君の味方だぞ？レイト」

第10ページ…：君と夕日と…（後書き）

いやゝ、今回は結構ほのぼのと書いてしまいましたあゝ。

五月病…恐ろしい。

それでもって今回のゲストはエイン・ディ・バールさんでえーす！

エイン「……………」

まあ、無理矢理連れて来たから何も言えないです。

特徴は…黒いニーソックスに赤と白が主体の半袖！その襟首のオレ
ンジリボンに背中の中分くらいまでの長いポニーテール！そして赤
いピンヒール！いや、もう…好みの問題ですが、エインさんはかな
り気に入っているキャラです。

エイン「…ディ・ラスティバル…」

それでもって、胸ストーン！

ツンデレ！

これ以上のキャラが居るでしょうか！？
ルイ。と同じくらいにしたい！

エイン「ブライス・ライデット！」

どーーーーん

ひぎゃあああああああゝゝゝゝゝゝゝ！……！！……！！……！！

エイン「…次回も絶対読みなさい。輝け、希望のJustice」

第11ページ：…部屋への招待（前書き）

ふう、なんかヒットランキングの5位を行ったり着たりはこの作品。

皆様のおかげでやっとプロローグ含めて12話目！

遂にここまでできたかあ！

第11ページ……部屋への招待

「はううううー！どうしましうどうしましうー！迷っちゃいましたー！」

黒いローブを頭から被った人があたふたと慌てている絵。誰でも思うだろう、変人。変わり者。変質者。

さつきから階段に躓いて転ぶし何も無い所で壮絶に転ぶし周りの人には笑われるし。

赤い絨毯の上をただ歩き回って広い城内中を駆け回る。

何故か城内図書館に行こうとしたら屋上に出るしトイレに入るし保健室に入るわで……ここは何所なんでしょう？

「なんて聞いたら迷子の証ですうー！何所かに地図とかあー！」

あつたら自分から侵入者に姫様の王室はここですと伝えているような物だ。有る筈ない。

毎回毎回着ては迷うこの少女。方向音痴。

「図書室はあー！何所ですかあー！！？」

周りの人に聞くと言う術も思い付かず、少女は廊下を目に涙を溜めながら走り出した。何故か朝方に着た筈が、もう外は闇で染まっていた。

「ふあああああー」

目を擦りながら視界をハッキリさせる。涙を少し溜めながら空を見る。沢山の星が見えると思った零人の視界に映る綺麗な顔の人。母さんに似ている。凜々しい瞳と表情が良い意味で崩れていて、優しい顔になっていた。その人の手が髪を撫でて、心地良い。

「レイト、起きたか？」

「え……な、レイ……チエル？」

母親以外にされた事のない事に戸惑いを隠せない。顔を支えてく

れている感触はきつと太股。月の光が顔を照らして、一層輝いている。

「気持ち良さそうに寝ているのでな。起こす気も失せてしまったぞ」
顔が赤くなる。そうだ、この世界には男が居ない。だから平気で出来る。だけど…もし男がいたらレイチエルはこうしてくれただろうか？こうやって優しい笑顔を向けてくれるだろうか？零人はレイチエルに見惚れて思ってしまった。綺麗だ。母さんと被ってしまう。一番大切な人と。

「いや…その…」

口から言葉が出ない。目の前の少女が美し過ぎるから…。

「どうしたレイト。具合でも悪いのか？」

「な、なんでも…ない」

「そうか。ならば良いのだが」

こつこつ時のレイチエルの鈍さに感謝した零人。

「そ、それより、何でお前は俺に膝枕？」

嬉しいのだけどなんで夜まで寝ていた零人に膝枕をしていたレイチエルが気になった。

「気に入らないか？」

「滅相もない！男の夢だからな。お前で良かったよ」

レイチエルの太股に頭を乗せた状態で零人はハニカミながら微笑んだ。夜空色の髪と瞳を持った少女は、茶髪の少年に闇の中で微笑み返す。

「伝説の男にそう言って貰えるとは、光栄だ」

零人は気恥ずかしくなってベンチに手をつけると音を立てて石畳の上に立ち上がる。

「あながと」

「あながと？さんきゅうと同じ意味なのか？」

レイチエルがベンチに座りながら言ってくるのを零人は苦笑しながら「ああ」と言い返した。

また、してくれると良いんだけどな。流石に気恥ずかしくて言え

なかった。

「母様に昔、良くやってもらっていたのだ。安心できたから、零人にも大丈夫かな」と

嬉しい事を言ってくる美少女剣士に零人は微笑んだ。噴水の吹き出る音と水飛沫の音、虫や鳥の囁き声。全てが今、レイチエルと居るこの場では美しい音色。

その時のレイチエルを言い表すと、まるで天使。黒髪と黒い瞳を持った天使だった。

「貴君の寝顔、可愛かったぞ」

「な、何馬鹿な事言ってるやがる！」

笑顔で首を傾げて言うレイチエルを見ると、なんだか胸の辺りが熱くなる。あのツンツン女とは違う少女。剣を持った時の生き生きとした鋭く、冷たい美しい顔も好きだが、零人は今のレイチエルに見惚れていた。優しい笑顔が、また別の彼女のような気がした。「それより、貴君はどうして中央庭園に？姫様が部屋くらい用意してくれたであろう」

ベンチから立ち上がるとレイチエルは上目遣いで言うて来た。

「いや、きつと用意はしてくれたんだろうな」。けど、部屋の場合聞くのを忘れてな。ここで寝ようと思ってたんだ」

レイチエルが立ち上がったベンチを指差して零人は言った。背中が痛むが寝るのには困らなそうだったからだ。

「た、確かに暖かいが…風邪をひくぞ。…そうだ、わたしの部屋に來ぬか？ベッドも二人で寝られるくらいはある。貴君が良ければだが」

拳で手の平をポンと叩くとレイチエルは唐突にそう言った。

「え、良いのか？……っでえええええ！？　ちょ、おま、マジで？」

一瞬気が動転して疑問文で返してしまったが、流石にそれは不味いのではないのだろうか？自我と理性が一瞬で弾け飛びそうなんです。が。まあ、男が居ないから当然と言えば当然なのだが、それはちよつと…。

慌てている最中、腹の虫が音高く鳴り響いた。そういや朝、昼と飯を食う余裕がなかった。腹が今頃減って来たらしい。

「腹が減っているのか？」

「ああ…ちよつと食ってなかったからな」

レイチエルは腹の音で驚いたような素振りを見せたが、直ぐに普段の顔に戻る。

「わたしは医務室で食べたのでな。気付かなかった。レイト、今では食堂も開いてはいない。どうしても言うならば、わたしが作るが？」

その時、唐突に思い出す。剣士類のゲームキャラって料理上手かったつけ？

確か主人公とかは食す役、役に立たねえ。って、どうもこうも剣を扱う奴って料理下手じゃん。レイチエルには失礼だが…ここは止めといった方が…。

「むう、早く答えぬか」

少し考え過ぎたようだ。レイチエルが痺れを切らしている。

「…じゃ、じゃあ、頼めるか？」

俺のアホオオオ——！！！！ 自分から死に行つてどうする！？ ここには絶対胃薬なんてないぞ！トイレで死ぬなんて最悪だ！永久に残る！

「了解した。では、わたしの部屋に行こうか」

ああ…理性が吹っ飛ぶか料理で意識が飛ぶか。どっちも最悪の選択だな。

先に歩いて行くレイチエルの後を追って零人は少し足早に歩き出した。

第11ページ：…部屋への招待（後書き）

ええ、暑い！

小説を書く気力が失せて行く今日この頃！

だからと言って辛い、書かないとは言ってられないのも人生！

ちよつと今回はゲストを呼べませんが、次回は、じかいはあああああ
ああ！

第12ページ：：セカンドキス（前書き）

いやゝ、少し更新遅れちゃいましたね。

すみません！

でも、13話目書けて一安心です。

次回には特別編をアップさせて頂きますね。

第12ページ：：セカンドキス

レイチエルの部屋は城の第3棟にあった。説明…というか詳しく解説すると、王宮には兵士訓練生の寮がある。城から出てちよつとだ。町壁は城下を守っていて、城壁は城と、その中の色々な建物を守っていると言う事。レイチエルに連れて来られた時、城壁と思っていた物は町壁だったんだそうだ。

石畳を歩いて行き、城の門を過ぎて少し歩くと、立派な城のような寮が立っていた。高さにして3階。兵士の寮は違う所にあつてこの建物の10倍は軽くあるんだそうだ。

「でも、なんでレイチエルは訓練生寮なんだ？ 一個大隊を率いてる隊長なんて言ったら城内の個室とか…」

寮の扉を開けようとしていたレイチエルに零人は聞いた。

「ああ、わたしが姫様に申請したのだ。わたしはここで立派な兵士になった。だから、ここは余り離れたくないとな」

レイチエルの手が取っ手を引くと、寮内から漏れてくる光。夜中の中で少しでも目が馴れてしまったのか、目には眩しい。

「さあ、レイト、入ってくれ」

先に入ったレイチエルの後に続く。

目が馴れて見えて来たのは、立派な寮内。直ぐ近くのソファアに王城内と同じく床の赤く長い絨毯。掃除された壁。もう正に豪華。これは訓練生の寮なのだろうか？

「ここは優秀な訓練生が泊まる場所なのだ。普通の訓練生では入れない。だから、普通の寮とは違い、掃除もし易ければ狭くても良いと言う事だ。なにせ、そんなに優秀な訓練生は多くないからな」

零人が見渡しているとレイチエルが説明。もう板に着いて来た。

そんな時、見覚えのある茶髪のポニーテール娘が前の大きな階段から下りて来た。

「げっ！」

「な、なんであんたがここに!？」

長く、紫色のローブが目印の嫌味娘と言えば、エイン・ディ・バール。その名前しか浮かばん。

エインは心底驚いた表情をした後、レイチエルに近寄った。

「レ、レイチエル様!何故、得体も知れないアマガサ・レイト(好色漢)をこの寮にお連れしたのですか!？」

「煩いわ!俺を色魔キャラに仕立てるなエイン・ディ・バール(下ネター)!」

可愛げないにもほどと言う物が有る。こんなに苛立つ相手に会ったのも久し振りだ。

敵意剥き出しの瞳を零人に向けて言うツンツンエイン。フレーズは気にするな、用は馴れた。

「もう良いわ!外に出なさいアマガサ・レイト!あんたをこの世から消してあげる!」

先程入って来た入り口を指差してエインは言う。

「おうそうかい!ならこうしようぜ!勝った奴が相手を好きにする!一生な!ま、俺が負ける訳ないだろうがな」

「良いわよ!乗って上げる!あんたの負けた顔が目には浮かぶわ!」

口の減らん奴の一言でアニメなら自己紹介が終わりそうな奴だ。

零人は背中腰のエクシールを引き抜くと目の前に突き出す。そして、刃を頭の中で創り出した。

「来い!エクシール、ブレード!」

ベレンスの目の前で創り出した刃と同じ青く透き通った刃が鏝から現れる。ここで下手をして変な物を創り出したら一生こいつに笑われるからな。

エインはエクシールに驚いた様子もなく、ただ睨み付けて来る。良い度胸だ。

そして、寮から出ようとした時、目の前に煌く刃。一瞬の出来事にエインも動転しているようだ。

「止めぬか二人共!私闘は禁止されている筈だろう!」

レイチエルの逆手に持った剣が零人達の首元で煌いている。
その剣を持つている彼女の瞳も鋭く、怒りで燃えているようだった。

「レ、レイチエル様…その…」

エインはガラスを割った子供のように行き場のなくした戦闘心に困っているようだった。

「い、いや、そんな事知らなくてさ。すまん」

「あ、あたしも…その、ごめんレイト」

おお、頭を下げたエインなんて始めて見——て痛っ！頭を下げると同時に履いてる赤い靴のヒールで俺の足甲を踏みやがった！

冷汗を流しながら悲鳴を上げるのを耐える。今改めて思った。ヒールは不味い。痛い。

レイチエルはにこやかに笑う二人を見て溜め息を吐くと零人の手を握った。

「さあ、レイト。わたしの部屋に行こう」

ああ、この馬鹿の前で余計な事を…。

「な、ななな何ですって！？ レイチエル様！御止め下さい！こんな破廉恥色魔見境なしを部屋に入れるなど！」

エインは階段の一段を丁度踏んだレイチエルに叫んだ。

「誰が破廉恥色魔見境なしだって！？ ってうわわわ！」

誰だって怒るフレーズを言われ零人は勢い良く振り向いた。その瞬間、悪い事故が連発で怒った。

先ず、レイチエルが掴んでいた零人の手をうっかり離し、体勢が崩れた。そしてエインはヒールの高い靴が不幸を呼び、ローブとポニーテールを揺らしながら豪快に転んだ。零人の方が早く、倒れてエインを支えようとしたその時——、

「はう！！！！！」

エインを支えようとした零人は逆馬乗り状態でエインに乗られていた。そして、顔の辺りで事件が起こった。エインの桜色の唇と零人の唇が重なる。離れようにも零人が腰とエインは手と足を床にぶ

つけて力が上手く出ない。

「あふ、んちゅ、うううう」

口から息を出そうとしても出せなく、鼻で息を出す。

長い、長い、両方が立ちあがれないと言う状況がかなり気不味い。ローブが二人の顔を隠していたのが、何よりのプレゼント。レイチエルには何も見えない。

「ふあんふあ、ふおをえふおきなふあいよ（あんた、覚えときなさいよ）」

「ふうふうふあいふあふえんふあ、ふふいふあわふいふいふあふあいふう（煩い喋んな！口から息が入る！）」

暗闇の中だから解らないのだが、エインの顔の辺りが熱いのが解る。きつと頬は真っ赤だろう。言ったら殺されるから止めておくが、てか、なんで鼻声だけで言ってる事が解るのか気になる。

先に体を起こしたのはエイン。ローブが外れると視界に光りが戻り、エインの顔が見え「痛っ！何で顔を殴る！ぶはあ！事故だしがはあ！人の話をぶべらもお！」る前に殴られる。

「死になさい！このキス魔変態痴漢！食らえ！ブレイズ・サイレス！」

「ぎゃあああああああ！！！！！！」

事故なのには思いながら、激痛で零人の意識は途絶えた。最後に見えたのは、ツンツン娘の恥ずかしがったような、キレたような、そんな顔だった。

だからなんでお前がそんなフレーズを知ってる…。

第12ページ：：セカンドキス（後書き）

え、今回はわたしの夢を書かせて頂き、誠にありがとうございます。

え、何？

エインとキスするのが気に入らない？
んな事知りません！

でも良い雰囲気で終われたと思いませんか？
え、思わない？

そんな貴方にはブレイズ・ノンを見舞います。

まあ、日々精進精進の毎日で御座いますよ。

零人「嫌い！食らえ！エクシール！」

エイン「灰になれ！ブレイズ・スパイラル！」

ひぎゃあああああああ——！！！！！！

零人「作者はもう使い物にならねえし…やるか？二人で」

エイン「あ、アンタがやれば良いじゃない」

零人「まあまあ」

エイン「し、仕方ないわね…」

零人&エイン「次回もお楽しみに！輝け！希望のJustice！」

エクストラページ……レイチエル（前書き）

え……やっとUP完了！

特別編始めてUPだ……！

つとはしやぎ放題なのですよ、はい。

実際言うと4日間風邪をひいて寝込んでました。久し振りだったから辛かった……。

と、まあ愚痴はこの辺りにして、これから読みする特別編は本編と少し関係しています。

興味を持っていただけなら幸いです。

エクストラページ……レイチエル

雨笠、夏。

異世界に飛ばされて男が伝説の生き物になっていた事を知った17才（高校二年生）。

得意な事、運動と料理。苦手な事、勉強と諦め。

母さんを養う為に、来る日も来る日もバイトに明け暮れていた。まあ、結構体力がそれで付いたのは嬉しいけどな。腹筋見てくれ。宅配の仕事を一周間休まずやったら割れた。遅しいな、有る意味。至って普通の生活を送ってたんだが、いきなり化け物に襲われるわ、美少女剣士と戦う事になるわで大忙しだった。

「レイト……早く入れ……！ 気持ち良いぞ……！」

今、俺はレイチエルと言う少女で一個大体を率いている隊長と一緒に近くの海に着ている。誘われたんだがな。まさか、この世界でも海で遊ぶ文化があるとは。水着がない零人は、パンツで泳ぐ事になる。トランクスで良かったとつくづく痛感する。

「レイト……！？」「レイチエル

しかも、この世界にも水着はあったのだ……！ 何故かは知らない。全裸で泳がれるとこつちも何所向いて良いか分からないしな。

零人の武器はエクシール。グリップを握って刃を想像すると刃が思う通りに出て来る。

ん……ファンタジーだな。空を飛んでいる鳥を見ながら零人は呟いた。虹色の鳥が飛んでいた。何時見てもこの状況は新鮮だ。あの鳥、何の味がするんだろ。

「む……レイト……！！！！！！！」

「わひゃあ……！」

近くで大声を出されて、零人は間抜けな声を出した。

慌てて振り向くと、何時も被っている帽子を着けず、タイツも零人が譲ったジャンパーも脱いで着たビキニ姿のレイチエル・カルマ

(16才)。年相応の体のメリハリに飾りが無い空色の水着。ブラは肩の部分と背中の部分で結び、下は横の場所で結ばれている。黒髪が光っているようにも見えて眩しい。剣を持っていない所も新鮮だ。

「ど、どうだろうか？こういう物を着たのは始めてでな。似合っているか？」

まるでカップルのような口調で聞かれると目を背けそうになる。

やはり剣士。鍛えているのだろうが筋肉は付いていない。その代わり、引き締まった脚や太股、ウエストのライン。括れが良い。

肩まで行かない横髪と後ろ髪。抜群のスタイルやはずかしさを佩びた赤い頬が零人の心に刺さった。

「……………！！！！！！(ぶんぶんぶん)」

無言で首を力の限り縦に振る。これは来る。

「そ、そうか。ちょっとだけ心配したのだが、良かった」

炎天下での水着と笑顔。しかもとびっきりの美女と来ている。こんな展開も悪くはない。

レイチエルは安心したように息を吐くと、零人の手を引いた。

「さあ、姫様がくれた休暇だ。今日は、楽しもう」

きつと彼女も出来ないと思うほどに働いていたバイト時代とは桁違いの幸せ状況。白く、木目細かい手の平が零人の手を握り締めている。

剣士とは思えない趣味を持っている少女。こんな子が自分から戦いに行くなんて間違ってる。今の俺には、レイチエルが何と戦っているのか解らない。だけど、今の、この笑顔を崩させる訳には行かない。笑っていて欲しい、そう思った。

海に脚を入れて行く。浜辺とは対照的な冷たい海。肌で感じる海は、少しだけ心に染みた。

「どうした、レイト」

少女は髪を揺らしながら零人の顔を覗き込んだ。

「あ、いや…なんでもない」

何時かは帰らなきゃならない。何故か、その言葉が胸を締め付けて来た。

やる事と言えばバイト。そんな毎日を送っていた日々とは比べ物にならないほど、良い暮らしを送っている。だけど、何時かはこの少女の所を去らなければならない。自分にそれが出来るだろうか。

「ふふ、気持ちいいレイト」

微笑みながら水を操るように遊んでいる少女。

零人は、そんなレイチエルの姿を、ただ見詰めて微笑んでいた。

そんな時、零人の顔に掛かる海水。前を見ると掛けた張本人が笑っていた。

「呆けていると、また当てるぞ？」

自分を見ていなかったから拗ねていると言う事ではないだろうが、その姿が嬉しくなる。可愛い、一言そう思う。

前屈みになって拗ねている顔を見ると見惚れてしまう。少し福与かな胸に、メリハリのあるスタイル。アイドルになれても可笑しくない顔立ち。こんな女の子と遊んでいる事自体夢だと思う。夢なら覚めるなこの野郎。

「なら、今度はこっちからだ！」

「きやう！？」

そんなこんなで、零人とレイチエルはバカップルのような事を、一日やってました。

「アマガサ・レイト（アホド変態）！こんな時間までレイチエル様を何所に連れて行っていた！？」

「黙れエイン・ディ・バール（ツンツンレディー）！」

帰ってからエインの誤解を解くのにかなりの時間を費やしたのは言うまでもない。

第13ページ：裸ジャンパー（前書き）

えー、前回出した話が間違いであった事に気づき、かなりのヒステリック&絶望に苛まれた作者です。

つか、今世紀最大の間違いですね。

えー、今回の話が本物です。
楽しんで行って下さい。

第13ページ……裸ジャンパー

ボコボコにされて、飯も食えずに向かえる朝。ふかふかなベッド。そして、良い匂い。なんでこんな香りがするのだろうか？日差しが物凄く眩しくて、枕で顔を隠す。学校行かなきゃいけないけど……面倒だ。辛いし、寝よう。欠伸が出てベッドの香りを堪能する。……ん？この香りって……確か、あいつの——って何で！？

「今日日曜日！よつと！」

素早く自分の上に被せてある布団を退かす。

見えるのは、豪華な部屋の装飾。天井のあるベッドに白いシーツ。そして、洋服のクローゼットに長身の鏡。結構さっぱりしているが、豪華さは目立つ。

零人は長身の鏡の前に立ち、自分の体を見詰める。白と黒のラグランに青いジーンズ。目立つ地毛の黒髪に黒い瞳。見覚えのある人物が鏡に映っていた。俺だ。夢じゃなかったんだ。レイチエルに会った事も……ベレンスと会った事も、そして、エインとキスをしてしまった事も（ああ、俺のセカンドキス……↑ファーストキスが母親）。窓から漏れてくる太陽の光。

零人はオレンジ色の靴が揃えられて置いてある所を見ると、それを履き、匂いの香る方の扉へ向かった。木製の扉を開いて部屋を見渡す。

「おはよう、レイト。大丈夫か？昨日はヒーラーに頼んで手当てをして貰ったが——」

肩まで行かずに切られた黒髪は何時もの帽子を被っていない。そして夜空色の黒い瞳。何より、その姿に凝視する。零人のあげた赤色のジャンパーの袖を捲り、フライパンを手に持つ少女。そして、裾の下に見える引き締まった綺麗な白い脚。これはもしか……裸エプロンならぬ、裸ジャンパー！

「え、いや、あ、ああ！大丈夫大丈夫！エインにやられたやつだろ

！？ 馴れてるからな！」

男の夢を軽く超えた格好で零人の前で料理を作っている最強美少女剣士。おじちゃん我慢限界を超えそうだよ。てかよほど気に入ったんですねそのジャンバー！

「そうか、良かった。余り自信はないが、料理を作っているのだ。出来たら呼ぶから…その…待っててくれぬか？」

少し恥ずかしくも微笑みながら頬を赤く染めて聞いて来る最強の美少女剣士の彼女。

な、なんだこの嬉恥ずかしムードは！こっちまで何か顔が熱くなるぞコンチクショ〜！

「おお、解った」

この王道恋愛ファンタジーな展開は一体…。

それから3分経過した時（ズボンの中に入ってた携帯電話をみたらジャスト3分だった）、レイチエルが籠っているキッチンの扉から『レイト〜、食事だ〜』と声が聞えたので心配で引き攣っていた顔を整え扉を開けて突入すると、零人の予想を良い意味で越えた料理が綺麗に作られていた。何か解らん食材で出来た色合い綺麗なサラダに少し多いクロワッサン。コーンスープ（？）に自作であろうフルーツ（？）ジュース。盛り方も皿のチョイスも凄く上手い。てか、レイチエルが自分の世界に居たら将来の夢は剣士ではなくお嫁さんだろう。てかお嫁さんにしたい。

木製のテーブルと椅子。豪華な部屋とはかなり不相応だが、余り気にならなかった。

置かれたスプーンとフォーク、そしてナイフは綺麗に磨かれていて零人の姿が映る。

「うわ…すっげ」

銀食器と言うやつだ。始めて見た。

レイチエルは「早く食べてくれ」と零人を急かして来る。料理は逃げないと言いたいが、確かに冷めたら勿体無い。

椅子に腰掛けて「頂きます」とフォークを手に取って言うサラダにフォークを伸ばす。シャキシャキした歯応えが心地良い。普通のレタスやピーマンとは違う食料がまた新鮮だ。

クロワッサンを口に入れられるほどの大きさに千切って口に入れる。ここではコンビニもない筈だからきつと自分で焼いてくれたんだろう。バターの甘さがパンの味を引き立てている。

コンスープっぽいスープは何だか懐かしい味がした。

ジュースは甘くなく苦くなく、喉を通ってくれる爽やかな味。例えれば…リンゴとレモンを合わせたと言った所だろうか。かなり口に合っていた。

「美味しい…！幾らでも食えるぞ！」

昨日何も食わなかったから美味いとかじゃなくて、本気で美味い。母さんの料理と張り合える。レストランなんて目じゃない。

「ふふ、本当に美味そうに食べるな、貴君は」

レイチエルは幸せそうに零人を見ていた。

「レイチエルは食わねえの？」

不思議そうに零人は言った。レイチエルはテーブルに膝を着いてジツとこつちを見ている。もしかして、料理が美味いかどうか気になっただけじゃないか？

「そうだな。頂くとしよう」

気付いたようにレイチエルはスプーンを手に取ってコンスープを飲み始めた。勢い良く飲み過ぎた。結果咽る。零人は近寄ってレイチエルの背中を叩いた。このドジッ娘剣士は…。

「ゲホ、そ、そうだ、レイト。貴君に剣術を訓えようと思ったのだが、今日は大丈夫か？」

「へ？」

この幸せシユチュレーションと真反対な事を言ってきたレイチエル。確かに剣は貰ったが使いこなせないと言うのは如何せんカッコ悪い。それに、訓えてくれるのはこれ以上ないってくらいの剣豪だ。損はないだろう。これから何が起こるか解らないし、強くない

と駄目だな。

予定と言っても何もないし、大体、

一日目で剣士に助けられる↓女しくない世界に突入した事を知る↓城下に入る↓姫と会う↓最強剣士とガチンコバトル↓死に掛けた↓剣を貰う↓優等生訓練寮へ赴く↓エインからの逆襲。

なんて感じのハードボイルドな一日だったからなあ。友達つくろうにも無理だし、きっとトップアイドルの一日以上の労働だったに違いない。ちょい筋肉痛があるが、まあ、バイト三昧を始めた頃よりはマシか。

「じゃあ、お願い致します」

深く頭を下げて料理とお礼を兼ねた。そういや…風呂入ってねえな。ちよつと服から汗の匂いがする。加齢臭じゃないが気になる。夜にでも、レイチエルに風呂場を教えて貰うか。

「その前に食器を片付けねばな。レイト、済まぬが半分持ってくれぬか？」

「全部持てるわ！」

まだ男と言う事を完璧に理解されていない所を見るとやっぱり悲しい零人だった。

第13ページ…裸ジャンパー（後書き）

ふう、やっと書き終わった第15話。

次の話は少し遅れそうなので、ご承知くださいませ。

それと、感想を下さった皆様、ありがとうございます。

第14ページ…剣と闘志（前書き）

この話が間違えて投稿してしまった場所です。

我ながらよくあんなスランプ状態で書けましたな…（汗）

結構変えてあるので楽しんでいただけたと思います。

第14ページ：：剣と闘志

「きつつ〜!」

手に持ったエクシールと、半分感覚を失っている手の平。今度グリップに包帯でも巻いておこうかと薄れ行く意識の中で考えている。まだそんな体力があるか自分。

「振りが遅いぞレイト!」

「へあ〜い!」

朝の頃と性格が正反対のレイチエルが目の前で剣を鞘に収めながらジッと見つめて来ている。シュチュレーションがこんな事ではなければ幸せだったかも知れない。

朝食を食べていた時、断れば良かったと自分を責める。

「筋は良いのだが…。1万回程でこれとは」

溜め息を吐きながら残念そうに見つめる黒い瞳が零人の姿を映していた。

「一万で疲れてないなら…化け物だ、つてえの!」

地面に両手を手つけてゆっくり立ち上がる。首を横に曲げて音を鳴らすと落としたエクシールを握り直した。軽いグリップだと思っていた重量が、疲れた腕には重く感じてしまう。汗が背中から腕を伝い、地面に染みを作る。

「ならば、わたしも一緒にやろう。好敵手がいれば、捗る事もあるであろう」

「…あ、ああ」

曖昧な返事をして零人はエクシールから蒼い透けた刃を創り出した。

まるで、スター。オーズのライトセ。バーみたいだなと、映画で見た場面が思い出される。

「一つ!」と高く美しい声が空に響き渡る。零人も慌ててそれに続きだした。確かに一人で振っていた時より、レイチエルが隣で振っ

ていてくれていた方が安心する。何故だろうか。

「良い感じだぞ、レイト！」

「当たり前！」

空に剣が風を斬る音と、数を数える二つの声が響いていた。

「うむ、良い訓練になった」

微笑みながら汗を頬に流すレイチェルと、正に地獄絵図を見たような目をしながら震える両手で体を抑える零人。どっちが男かわからない。

「ふふ、大丈夫か？レイト」

「ぜえ…なんで…そんな…喋れる…」

息を途切れ途切れにしながら仰向けに倒れる。

剣を地面に刺して微笑んでいるレイチェルの顔が目には汗が入ったせいで濁っている。

「初心には辛過ぎたか。うーむ大丈夫だと思ったのだが…」

顎に指を当てて、納得いかないといった表情を見せている。

こっちの方が納得いかない。何故男が戦闘不能に陥っているのに少女剣士が汗をかき、息を切らしているだけでこんなにも喋れるか。日頃の鍛錬の違い？そんなもんでこんなにも違うのか？

「……悔しいか？レイト」

「あん？…っ！？」

レイチェルが突然投げて来たエクシールを驚きながら受け取る。直ぐに鞘に収めていた剣を抜くと零人の喉元に先端を向けるレイチェル。

「貴様は男なのだろう…？女のわたし相手に体力で劣っているのが悔しいか？剣を上手く扱えないのが悔しいか？このわたしについて来れないのが悔しいか？」

あの戦いをする時の瞳。彼女の瞳に蒼い月が宿った錯覚を起こす。

「立て。わたしに剣を向けてみる」

後ろへ歩いて距離をとるレイチエル。

「…やってやらあ！」

遊びではない。この瞳は、見下す剣の刃のような輝きだ。

手に握ったエクシールを振る。水のように何かが集結し行き、エクシールの先端から蒼い刃が輝く。

レイチエルは剣の先を地面につけている。

空気を吸うのも辛くなるような重い雰囲気漂う。

「…レディー…ゴー！」

掛け声を出すと零人はレイチエルに向かって走り出した。間は30秒ほどで埋められる距離。だが、高鳴る鼓動が大きく、距離が長いような錯覚を起こさせる。

「喰らえ！」

剣を縦に一閃迷い無く振り下ろす。蒼い剣の残像が走り、レイチエルに向かう。

「剣太刀が甘いな」

「な!？」

剣先を地面につけていた筈のレイチエルの剣が音もなくエクシールを防いでいた。目の錯覚か、本物か、剣の間に火花が散った。ギリギリと剣から交わっている証拠のような音が聞こえる。

歯を食い縛りながら剣の重圧を耐える。

「ふふ、これが…男の力か」

心底嬉しそうな笑みを浮かべる。危険な感じのする顔が、綺麗だと思える。

「呆けていると…やられるぞ？」

剣を弾かれ、何かが体を持ち上げ、吹き飛ばす。剣圧か、それとも魔法と言われる物だろうか。宙で回転するとエクシールの刃を地面に突き立てて自分の体を抑える。

剣の樋の部分に頬を当て、剣先をこちらに向けている。狩人の目と言っても納得できるだろう。

「さあ、レイト。貴君の本当を見せてくれ。貴君の正義を…力を、もっとわたしに向けてくれ」

あれで足りない？思い切り振った剣を軽く弾かれた上にまだ本気じゃない。

「…面白れえ、やってやろうじゃねえか！」

再び自分のジャンパーを着た、目立つ少女に刃を向ける。

今度は、決めると心に刻み剣を横に振り振りながら全力で走り出す。さつきより距離が長い。これなら行ける。

地面を蹴ると持ち前のジャンプ力で出来る限り高く跳ぶ。そして、片手で持ったエクシールをレイチェルの剣に向かって振り下ろした。普通の女だったらこの攻撃は受け流せないだろう。

「響け！我が剣の聖音！ブレイヴ・アンデット！」

動くと考えていた剣は地面に刺さったまま、レイチェルは剣のグリップを片手で握ると、零人に向かって平手を向ける。紫色の波が零人の体をエクシールごと吹き飛ばした。

目を見開きながら驚きで脚が震えた。

なんだ今のは？防御か何か？

「そろそろ…こちらから行かせて貰う…！」

俊敏な動きですぐさまレイチェルと零人の距離が埋まる。

「聞け！我が剣の咆哮！ブレイヴ・レイデット！」

紫色の輝きを佩びた剣が零人に向かう。

エクシールで真正面から対抗する為、地面についている両足を全力で踏み、振るう。

交わる剣。鋼の響き合う激しい音が、何度も耳に響いて来る。このままじゃ…きっと対抗出来ない。何か…剣を…この蒼い刃を強靱にする為の方法は無いのか？

「そうだ！」

この刃はどう創った？俺の創造だ。このエクシールは何の要だ？俺の創造刃を具現化する為の要だ。なら、紡ごう。この危機的状況でも、やってみせる。

レイチエルの剣を寸前で避ける。それと同時に距離を取る。砂埃が立ち上がり、姿が陰になる。

大きな剣。攻撃だけに長けた、大きな剣。

「…来い！エクシール・グレートオオオ——！」

開けた距離を一気に刃だけで縮める巨大な刃。創造した剣と名前を叫び、エクシールから具現化する。…成功だ。大きな大きな両手剣が手に収まっている。重さはない。エクシールのグリップの重さだけだ。

「だが、攻撃力は…違う！」

「つく！響け！我が剣の聖音！ブレイヴ・アンデット！」

変わった攻撃に直ぐ反応をするレイチエル。エクシールの刃が障壁状の紫波に当たり、跳ね返る。しかし、これでは終わらない。

「最後だ、エクシール・ブレードオオ！」

弾かれた刃を消すと、レイチエルに向かい新しく紡いだ刃を向ける。

「聞け！我が剣の咆哮！ブレイヴ・レイデット！」

第14ページ・・・剣と闘志（後書き）

楽しんで頂けたでしょうか？

レイチエルの抱護身も唱え方を変えています。
かなりここでスランプしました…。

次話からはこれからのペースで連載します。
宜しく、お願いします。

第15ページ……白魔術士の少女（前書き）

やっと……やっとロリコンの味方、あの子が出ました！

まだ東条さんの時のようには出ませんが、ちゃんとメインになる予定です！

第15ページ……白魔術士の少女

「ま、参った……！」

零人は地面に倒れて枯れている喉で精一杯言った。最後の一撃合戦の時に零人は負け、吹き飛ばされて敗北した。一瞬、レイチエルの体に羽のような物が見えた気もしたがきつと見間違いだらう。

「うむ、良い試合だったぞレイト。筋が良い。羨ましいほどにな」

相槌を打つのも無理。負けた後に体中動けないほど痛くなってる事に気付いた。筋肉痛は動けば治ると言うが、動くのが辛い。地面に横たわっているのに零人は体に痛みが走るのを感じている。

太陽が目にあたり、眩しい。空は今気付いたが満点の青空。こりや洗濯日和だ。

「ふふ、済まんな。わたしも少しばかり本気を出してしまった。今治癒の者を連れて来よう。待っていてくれ」

レイチエルはその言葉と共に走り去って行ってしまった。

だが、この状況は流石に辛い。足腰死ぬほど痛い。少しばかり本気を出したって……少しに俺は負けたって事か。流石、子供の頃から剣士をやってる奴は違う。勝ってもダメージを引き摺っていなかった。

手に握られたエクシールを零人は見た。蒼く輝いていたグリップが、少しだけ輝きを失っているような気がした。負けた零人の気持ちを表しているように。

そんな時、地面に近い耳が聞き取った足音。救護の奴か？と待っているとその人影は零人の顔の覗いて来た。何かが顔に掛かったと思ったら、黒い布。

「あのお……大丈夫ですか？」

脚を曲げて顔を覗き込んでいる少女。蒼い蒼い海色の瞳に赤く燃えあがる対照的な髪、フードから覗いた美しくも幼い白い顔。

「えと……動けませんか？瞳孔開いちゃってるし、し、死んでる？」

死んでると聞く人を零人は始めて見た。先ず脈を調べんか脈をと言いたい所だが、生憎零人は体が動かないほどのダメージを受けていた。体が言う事を聞かない。

少女は長く全身を覆うような黒いマント。なんでこんな者を着ているのだろうかと疑問に思う。顔は幼いが綺麗に整っているし、隠すような事はないと思う。

片手に持った、重そうで高価そうな赤い本が目を引く。

「えと…生きていたら…我慢していて下さい」

少女は音を立てて本を開くと、ページを覚えているかのように捲れ続けているページに自分の手を置いた。途端に、少女の足下の地面に円の魔方阵が開く。その魔方阵から発せられた蒼い光が少女を包み、護っているようにも見えた。

「エッシエル・クルシエル・アビリド・ピュリフケーション」

唱えているのは呪文だろう。手を置いたページを広げたまま目の前に浮かすと、少女は零人に手の平を当てた。すると、体の中から何かが出て行く感覚。疲れたと言う疲労感が空に消えて行く。

この子は…魔法使い。きつとエインとは違う、白魔法と言うやつだろう。

何かの小説で読んだ事がある。赤は攻撃魔法主体の相手を傷付ける為だけに出来た魔法。強い物だと町一つ丸ごと破壊する。白魔法は相手を癒し、そして戦ってもらう為の魔法。優しい力と言って良いだろう。全て受け売りだが、まさか自分が両方の魔法を目にするなんて思いもしなかった。

しかし…我慢？

「…いだ！？ え、ちょ、マジで痛い！死ぬる！殺される！」

少女の言葉を思い出した瞬間、零人の体全体に激痛が走り出した。体は動くが感覚がなくなるほどの痛み。死ぬ直前の言葉は嘘を吐かない。

「もうちょっとですから……ビィ・アルビシャス！」

少女が最後の呪文を唱えると、零人の体から激痛が飛んだ。しか

し、流石に痛みを覚えたあの瞬間だけは忘れない。まるで、レイチエルに脇腹をやられた時のようだった。

「テメエ！白魔法って言ったら暖かいもんだろぅが！かなり冷たくなつたぞ！」

地面に手の平を着けて勢い付けて立ち上がる。体の頑丈さはバイトの成果だ。

「ひう！？」

治癒をした少女は零人に驚いて転んだ。本を地面に落して体を震わせている。マントからだとあんまり確信が持てないのが辛い。ちゃんと見ようとすると、少女の顔は隠れてしまい、鼻と桜色の小さな唇しか目立たない。後は、ストッキングでも穿いているのかソックスとは違う感じの脚が見える。それ以外、マントが大き過ぎて見える物も見えない。

「す、直ぐに…起きた…？」

落ちた本を抱えて零人を驚いたようにじっとマントの下から覗いている。

「起きなかつたら死んでるつつうの！…たく、危なかったあゝ」

痛みは少女が自発的にやったのか事故なのか解らないが、もしこれが男だつたら慰謝料を請求する所だ。手を振ると零人は少女に近付いた。

「はわ、え、ええ…と…」

何故か忙しなく動き後退して行くマントの少女を追い込んで行く。傍から見たらどんな状況なのだろうか。きっと袋のネズミとはこの事だ。

少し追い駆けると少女は隅の壁に追い詰められた。

「さあ！正体を表せ！」

零人は手でマントを掴むと引き剥がす。

その姿を見た時、零人は固まった。まだ幼い白い肌に蒼い海の瞳。そして…その燃え上がるように紅く長い髪。白いミニのスカートに黒ストッキング。幻想的な少女の姿だった。瞳が大きく見開かれ、

その瞳は零人だけを映していた。

「え……」

少女の口から漏れる戸惑いの声。零人も声を失っていた。覗き込んでいた時、少女の顔を見たが、しっかりと顔を見ると神秘的なほどの白い肌だ。まるでミルキーウェイのような輝きを放ちそうなほどに。

少女は啞然とした表情で口を開けたまま。悪い事をしてしまっただろうか。

「っ！」

自我が戻ったのか少女はマントのフードで顔を隠すと、コロッセオの出口まで走って行ってしまった。白い本を片手に持ちながら零人から遠ざかって行く。零人は、少女を追い駆けられずに視線だけで追っていた。

蒼く蒼く輝く空は、まるで少女の瞳を連想させる。

きっとあの少女の姿は忘れられないだろう。落していたエクシールを手にとるとベルトに収める。

「レイトオ——！治療班を連れて来たぞ——！」

「おせえよこのヤロオオオオオオオ——！！！」

第15ページ……白魔術士の少女（後書き）

どうでしたか？

白魔術師なのになぜか痛みを負わせる魔法でしたw

今日は余りかけませんが、許して下さい。

第16ページ：…何時もと違う君（前書き）

やっと、やっと20話まで後2話！

長かった！長かった！

ここまでホンツツツツに長かったです！

これも感想を下さった皆様のお陰です！

ありがとうございます！

と、まだまだ初編なのですが、そろそろ急展開を迎えたいですね。

ぐふふふふ。

第16ページ：…何時もと違う君

レイチエルに朱髪の少女の話をしたが、そんな人物は見た事がないと返され、零人は腑に落ちない気持ちを抱えながら中央庭園を歩いていた。

傷は少女の魔法で治癒されていたらしく、レイチエルは誰が治したとしてこく聞いてきたが、零人は可愛い女の子と答えて逃げ去った。そして足が向いて向かったのがここの中央庭園だった。

噴水の水が弾ける音と、金色の小鳥の鳴き声が響いている。寝るのには打って付けだろう。

「何やってんの、アンタ」

余り晴れない気分でベンチに寝転んだが、睡魔が来る前に聞き覚えのある声で阻まれた。零人は起き上がるとその人物が前屈みになって自分を見つめている事に気付く。

「お前こそ何やってんだ？」

目を細めながら零人は言い返した。

「こつちが聞いているんだけど……まあ、良いわ」

ポニーテールを風に吹かせて、そつと零人の頭の横に腰掛ける。何時も強気な彼女の姿はなく、ただ蒼く染まっている空を見つめていた。横顔は強気に張っている表情とは違い、優しく、暖かい。

「どうかしたのか？エイン」

「アンタに名前を呼ぶ事、許した覚えはないんだけど？」

明らかに何時もととは違う表情を浮かべている。零人に言い返す時も微笑んでいる事は奇跡に近い。

不思議に思つて零人は寝転がっている体を起こした。これが乗りの良い男ならきつと気の効く言葉を言うんだろうが、零人にはそれが思い付かなかった。

ベンチが軋む音が少し聞えた後は、先程と同じ噴水の音と小鳥のさえずり以外聞えなくなつた。

風が吹くことにエインの髪から発せられる少女の香りが零人の鼻を乗っ取る。さっきまであった木の香りは鼻に届かなくなっている。様子を伺うと言う事ではなく、声が掛けずらい空気を感じ、零人はエインに声を掛けられなかった。

腰のエクシールが当たり、少し邪魔な気がしてベルトから外し、ベンチに置いた。剣が恋しがっているように蒼く光ったが、無視しておく。

「ねえ？アンタ、確か違う世界から着たって言ってたよね？」

エインは髪を抑えて微笑みながら零人に問い掛けた。

「あ、ああ。俺は…日本の八王子ってところから着たんだ」

少し胸を弾ませながら視線を逸らし、顔が熱くなるのを隠す。ギヤップがある奴は可愛く見えるというのはこの事かと実感する。

「ニホン……ハチオウジ…ね」

少し片言だがしっかりと発音をしている。

オレンジ色のリボンが揺れ、髪も同じく揺れる。子供のような表情。無邪気な、友達に語り掛けるような口調。絶対に友達になれないと思っていたエインが近くで微笑んでいる。今なら、きっと小鳥と戯れているエインを見ても驚かないだろう。零人はハニカミながら必死に目を逸らしていた。

「ねえ、レイトってホントに『男』なの？」

少し身乗り出して零人に顔を近付けて来る。きっと知っている漫画のように俺が追い回されないのはこの世界の皆が男を知らないからだろう。最初から居ない者が突然やって来ても余り関心が湧かない。当たり前だ。

その前に、エインがやっている格好は、まるでグラビアアイドルの撮影写真のようだった。顔も良ければスタイルだってそれなりに良い。レイチェルほど胸も身長もないが、凛とした顔立ち。誰にも負けない正直な性格。これは普通の人は余り自身を持って表現できない事だ。

「聞いているの？レイト」

少し考えていたら、エインの顔が目のある事に気付かなかった。吊り上がり気味の瞳だが、エインには似合っていて綺麗だった。ブラウン色の瞳の奥には零人の姿が吸い込まれるように映っている。途端に昨日の出来事が頭の中を駆けて、少し焦る。

「え、あ…そういうつもりじゃないの…！」

乗り出していた体を引つ込めて少し言葉を強調する。この方が彼女らしい。ツンデレを萌えと言っている奴等の考えが解りそうな気がした。

一度だけ、ゲームショップのバイトをした時、仲間にギャルゲーと言うゲームをやらされた。その中のキャラが無性に自分と合わない事に気付いた。それがツンデレと言う奴だ。最初は毛嫌いしている癖に、好意を持つと近寄って来る。それを受け止める主人公も気に食わなかった。それから余り、そう言う性格の奴に近寄れなくなった。ゲームショップのバイトはその次の日に辞めた。自分に合わないと自覚したからだ。

だけど、零人はエインの姿を瞳に映した。

目の前のローブを羽織った少女は、好感が持てた。恥ずかしがっている所や、自分の行動に一々ケチを付けて来るのが気に食わなかったが、それでも、少女は何かが違うような気がした。

あのレイチエルの部屋に訪れようとした時も、レイチエルを本気で心配してやった事じゃないのだろうか？ベレンス姫と会う時に不機嫌だったのも、本気で自分を信用できなかったからじゃないか？頭を大きく横に振る。そんな訳ないじゃないか。思い込み過ぎだ。

「何時か…帰れると良いね。自分の、居るべき場所に」

今にも泣きそうな顔をして俯いた少女。

「どうした？何時ものお前じゃないな」

「煩いわよ、ばか」

零人は静かに、エインの肩に手を置いた。一度だけ不安そうに震えたが、直ぐに落ち着いて身を任せるように胸の場所に倒れ込んで来た。

「母様……」

少し経つと、青空の下、ベンチに座っている零人の胸元でエインが声を出すのを我慢して泣き始めた。

母親の事を呟いたのは、聞いていない事にしよう。零人は心で決めながらエインを強く抱き締めていた。

「誰かに…言ったら殺すから」

泣き止んでからも、少しだけ体が震えていたエインが唐突に零人に言った。

「言うか」

零人の服の裾を掴みながら細かい声で言ったエインの頭を撫でて零人は微笑んだ。目の下を腫らして泣いた彼女の顔は、こう思うのも変かもしれないが、可愛かった。

安心したように目を瞑ると静かに寝息を立て始める。

疲れていたのだろうか。それとも、久し振りに安心して眠れたのだろうか。エインと言う少女の寝顔は幼く、あどけない可愛いものだった。

目の前でこんな無防備に寝られると言う事は、安心して身を任せられると判断してくれたからなのだろうか？エインの寝顔を堪能しながら零人は苦笑いで頭を撫でていた。

「今夜、襲撃する」

桃色の髪の美女が紫色に光る石に告げる。

石の影に隠れ、後の人物を見ると一人のローブを着た魔女は寝込んでいた。一番の注意人物はその魔女の髪を撫でながら優しい顔をしていた。

『策は？』

奥から響くような音色の音が石から響く。

自分の長過ぎる長袖を捲くりながら石を持っていると邪魔でしようがないが、仕方ない。上司の指示だ。

「先ず、わたし、リイナ・アビルレイが一人を仕留めます。その後、全ての軍隊に責め込ませましょう」瞳を閉じて静かに応対する。

『勝てるのか？ 伝説に』

伝説。それはこの世界を救ったと言われている男。

「勝ってみせます」

今までにないほどに胸が高鳴る。あの一個大隊を率いる少女と戦っていた所を見ると、久々に期待できる相手と戦えると言う物だ。自分に与えられた称号が輝くようにも思える。

『成功させよ。白き雷鳴』

第16ページ：…何時もと違う君（後書き）

さて、楽しんで頂けたでしょうか？

少しデレを出したエイン編だったのですが、本編にまさか出すとはじぶんでも思わなかった…。

話の内容が結構合い、ご依頼されたエインの甘い話を本編へ。
まあ、こういうこともありますよね？

さあて、次回予告をレイチェル・カルマさん、お願いします。

「うむ、今回は出番がなかったからな。さて、庭影に潜んでいた密入者。次回からは少しバトルが入ってきそうだな。お楽しみ要素満点だ」

つと、今回は久々のベレンス姫様登場です。
まだまだあの子は本出場となりませんね…。

実際言ってしまうと、僕はテ。ルさんが一番好みだったりするので
すがw

えゝ、言ってしまうと、エインは今回のオリジナルです。後、庭影に隠れている人もオリジナルと着ます。

話は崩さないようがんばっているんですよ？はい。

それでは皆さん御機嫌よう。

次回で会いましょう。

第17ページ：…迫る絶望（前書き）

えゝ、そろそろ序編を抜けます。

なんか一言講座を試してみたくなったのでw

第17ページ：…迫る絶望

起きたエインと別れると、零人は夕日に染まりつつある空を見上げた。この先で母さんは同じ光景を見ているだろうか。不意に母親の姿を思い出した。長く優しい香りがする母親の髪。何時でも微笑を絶やさない表情。今まで見て来た女性で母親を抜くような人は居ない。

「一番：大切な人」

首にしているリングのネックレスを手で握り締める。母親からのプレゼントだった。辛い時はこれを見て頑張れと言ってくれた。帰らなければならぬ。今直ぐにでも方法を見付け出してこの世界から出なければいけない。この世界から出難くなる前に。

守るべき人の傍に居なくちゃならない。

もう夜が近いと言うように小鳥が一斉に飛び立つ。噴水の水も赤く染まり、幻想的に色をつけている。月が薄っすらと見えて来る。赤い月と言うのも珍しい。始めて見た時は驚き焦ったものだ。

またレイチエルの部屋に行くか？と冗談めかしで自分に問い掛ける。

「そんな事出来る訳ないな… 姫に言ってみるかっ！！！！？ なあ！」

ベレンス姫に部屋を貸して貰おうと城内に入ろうとした時、零人の足下の地面が大きく揺れた。エクシールを片手で握り、地面に伏せる。安全対策と言われる一番の方法だ。

揺れが収まるには容易く4、5分は掛かっただろう。悲鳴や爆発音が伏せていた零人の耳に聞えて来る。城内部からだ。

地震か何かは解らないが、何かが城内で起こっている事は確かだ。「くそ！何が起こってるんだ！」

愚痴を吐きつつも零人は倒れた木々を素早く避けて王城内に向かっ

不測の事態と言った方が良いだろうか。

「いきなり展開した魔方阵はきつと… エルフ族」

人間に対してけして心を見せず、ただ何事もなく過ごしていたエルフ族が何故いきなり攻撃を仕掛けて来るかが解らない。温厚ではないが、積極的に攻撃なんてしない種族の筈だ。

応接間の椅子に座り、次々と流れて来る傭兵騎士の隊長が聞いて来る作戦に耳を貸す。

「魔方阵は王都、クレベルディア王国の町門外、東南の位置に展開しています。きつとエルフの民は防御壁を突破する気でしょう」

「防御壁の最大出力を。そして全ての民を町から避難させなさい。場所は王宮立大聖堂。早々に！」

指揮を何人にも出し、もはや自分がどうやって返答してるかさえ解らない。

エルフ族。魔法の使用に最も優れた種族。遠距離では戦う事すら危うい相手だ。軍もドンドンと追い詰められている。まさかこんなにも戦闘能力が優れているとは思いもしなかった。王軍があつさと敗れ、第一防壁を突破されている。町壁までは後第二、第三防壁以外残っていない。

「『ディア・ロイン』隊長！レイチエル・カルマ、到着致しました！」

そんな時、傭兵騎士の後方から聞えて来る綺麗な高い声・正義感溢れる声の持ち主はベレンスの知る限り、伝説の男ともう一人しか居なかった。

「レイチエル！良く無事で！」

椅子から立ち上がり、兵が作った道を通ってレイチエルに近寄る。彼女独特の黒い夜空色の瞳が真剣みを佩びて輝いていた。剣を腰に提げ、仲間の兵を率いている。

「わたし達は敵の一個中隊を撃滅致しました。その時見掛けたのですが、白い二つ持ちの武器を扱う桃色の髪的女性が大隊を率いているようです」

ベレンスが幾ら反対しても、レイチエルは戦場に赴き、成果として一個中隊を撃退して来た。傷は殆どなく、服が少し破けている程度だ。流石と言える。五十人は超える中隊をたったの二十人で制したのだ。16才で大隊を率いたのは彼女が始めてだ。

「姫様、どうかわたし達に、大隊を討たせて頂けないでしょうか。これは、名誉などの関係は御座いませぬ。クレベルディアの存亡の戦いです」

レイチエルの言う事は解る。エルフ族もここまでして冗談なんて事はないだろう。完璧にクレベルディアを乗っ取る気だ。

国を守る事は使命だ。だけでも、一番の親友、何もかもを打ち明けられる親友を戦場に行つて自分の為に戦わせるのは酷だった。姫君は全てを自分の駒のように使わなければならないのだろうか。行かないでと素直に言つてはいけないのだろうか。

「レイチエッきゃああ!」

最初の揺れとは違う、白の上から揺れるような感覚。レイチエルは悲鳴を出さず、屋上へと向かう階段に視線を向けていた。

ベレンスの仕事部屋へと向かおうと階段を上つていた時、突如として二度目の地震が城を軽く揺らした。危なく転げ落ちそうになる所を取っ手に捕まつて体勢を取る。

「これは…上か!」

危ない予感が脳内に走る。これは、畏かもしれない。何も考えずに行くのと直ぐにやられる。だが、策を立てている時間はない。

「うお!」

階段を再び上り始めたと同時に揺れる床。エクシールの刃を出し、

階段に突き立て体勢を整える。

完璧に数十階は軽く越える王城。どうしたらこの危機を救える？

「ええい！考えるより行動だ！行くぜエクシール！」

ベルトの背中腰に収めているグリップだけのエクシールを握り締め、右手に持ち階段を全力で走り出す。一階一階が物凄く長く感じる。学校の一階から三階へ上るのは訳が違う。時間制限はこの城がどれだけ持つてくれるかだ。

相手が何かも解らない。何かに攻め込まれている位しか今の零人には理解出来なかった。

だけど、命の恩人を放つては置けない。レイチエルや姫、エインが居るかもしれない。階段を息を切らせながら走る。音が響き、夕日が顔に当たる。こんな時に、魔法でも使えたらと思ってしまっ自分分が情けなくなる。

「はあ…！バイトでも…こんな、ハードな事、ないぜ…！」

階段は恐ろしいほど長く、体力を確実に奪って行く。余裕はない。一步一步が足に、心臓に響く。息をするのも辛くなるが、足は絶えず動かし続ける。

「うわっ！」

頭が疲れていた。揺れが来るのを忘れ、階段を上り続けていた足は滑り、体が宙を舞う。これは不味い。階段は螺旋形。落ちれば落ちるだけ落ちる。

「風よ！ウインデ・ディバイス！」

体が暖かい何かに包まれる。その形を持つ事のない風の上に零人は浮いていた。緑色の風が体を包み、風が弾き飛ぶと体は階段の上に立っている。

「気をつけなさいよ、アンポンタン」

声には覚えがある。ツンツンした口調が戻っているようだ。

「さんきゅ、エイン」

振り返ると片目を閉じて迷惑そうに片手で髪を直しているエインの姿。

そして、手には輝いている黄色いグローブ。手の甲の部分に宝珠が埋め込まれている。エインは零人の視線に気付いたのか手のグローブを目の前に突き出した。

「アンタ、これも知らないの？」

「そりゃ、日本人ですから」

「…これは魔法具。これで自分の中にある魔力を最大限引き上げるの。今回は緊急事態だから、特別につきて来たの」

流石異世界と感心してしまう。魔法具なんてラノベでしか見た事がない。

「それと、アンタこの城を上って行こうなんて思ってる訳じゃないでしょうね？」

「正解」

零人の言葉にエインは項垂れた。

「馬鹿。この階段、脚でなんか上れないわ。頭を使いなさい頭を」自分の頭を指で指しながら面倒そうに言ってくる。

直ぐに零人の手を握ると、窓に当たったエインの手が光り出した。

「しっかり掴まってなさい！屋上まで一気に行くわ！」

「まさか、ワー——」

最後まで言えず、零人の声と姿は、窓の中へと引き込まれて行った。

第17ページ：…迫る絶望（後書き）

「どうだっただろうか？

剣士のレイチエル・カルマだ。

楽しめたなら何よりだ。姫様も久し振りに登場したな。

次回はバトル系と言う物になるようだ。

アクション系が好きな人は見逃せないな」

とまあ、前置きさておき、そろそろ本編が発動です。

「うむ、結構良い始まり方ではないかな」

なら良かった。

「しかし、レイトとエインの仲が…」

それではまた次回！；

「む…輝け、希望のJustice！」

第18ページ……絶望を悲しみに（前書き）

さてさて、こんな感じで言うのもなんですが20話目と書いてあります。

……ここ、ここまでできたかあ……。

受け継いだ作品がここまで来るとは思いませんでしたね、はい。これからも、レイトくん、レイチェルさん共々、宜しく願います。

第18ページ：…絶望を悲しみに

「レイト、大丈夫？」

暗闇の中から目覚めると、風が頬を打つ。着ている服が靡いて気持ち良い。

「ここは…？」

「屋上よ。全く、ワープ後遺症なんて初めて聞いたわ」

腕を組みながら柱を背につけているエインが言った。

それと同時に気付く何かの破壊音と耳に響く未知の音。零人が驚き混じりにエインを見ると、頷いてそれを返して来る。

「さつきからよ。魔法と何かがぶつかり合っている。魔力が半端じゃないわ」

夕日に染まった日が頬を熱くする。エインの羽織っているロープが風に揺れ、今の状況を知らせているようだ。激しく鳴る音は耳に痛い。

「どうする？」

「…アンタとあたしがいれば、何時もの答えは出ないんでしょうね」
呆れ混じりに溜め息を吐くとエインの手に嵌めているグローブの宝石が輝き出した。零人はそれを見るとベルトに引っ掛けているエクスールを取り出し、刃を創り出す。

「先ず、敵かどうかを見極める」

「そして…」

「…後は個人の判断！」

柱から出ると目に飛び込んで来たのは桃色の髪の白い銃と呼ばれている物を二丁手にしている無表情の美女と、息を切らせて巨大な剣を両手で握っている緑の長い髪をツインテールにしている少女の姿。

両手剣を持っている少女には覚えがあった。町に入ってからぶつかってしまった少女だ

零人は素早く間合いを縮めると白い銃を持った女に向かう。

「…来たな」

女性は驚く事もなく一言呟くと、双銃の銃口を零人に向ける。

「させないわ！喰らいなさい！ライトニング・ドライト！」

エインの魔法が、女性の撃ち出した弾を零人の目の前で相殺する。後方で走る音がすると「飛べ！レイト！ウインデ・デバイス！」とエインが叫ぶ。

階段で転んだ時に助けてくれた呪文が、背中を強く押す。そのスピードに乗るように剣を振り振りながら走る。強く押された体は地面を離れ、一直線に女性に向かう。

「エクシール！」

見えない素振りですぐに女に振るわれるエクシールの刃。宙を舞う体。なぜ斬れたか、怖がりもせず。それは、女を斬る時にエクシールの刃をなくしたからだ。いわゆる鈍器。せめて悪くても失神だろう。

空中で回転をして女の方向を凝視する。女性の体には傷すら見当たらない。それどころか、振り向いて宙に浮いた零人に銃口を向ける。エインも呪文が間に合わない。

「…終わりだ」

女の指が引き金を引き絞る。ここで撃たれば終わる。エインも必死で呪文を唱えているが間に合いそうにない。

「鳴り渡れ！我が正義！」

空に響く声。澄み渡った声が零人の心に響いた。諦めると言う言葉をかき消す心強い声。

「エクス・カリバー！！！」

女性を吹き飛ばす剣圧。輝いている剣と吹き飛ばした者の手。宙を舞う零人の体を完成したエインの魔法が受け止める。もう少しで屋上から落ちている所だった。

「遅れてすまない、レイト」

最強と呼べる剣士が前で視線を向けて来る。輝いていた剣は、技を終えたからなのか休息を取っているようにも見える。

「遅いぞ、レイチエル」

「ふふ、すまないな。少し手下と思える進入者を捕らえて来た。後は…根源者だけだ。やれるか？ミリス」

レイチエルが呼んだ緑髪の少女は剣を構え直すと無言で頷く。

「副団長に言う言葉ではないな」

女性の銃から撃ち放たれた銃撃。少女は前の空間を剣で斬る。すると衝撃波が中心で起き、吹き飛ばされるほどの風圧が襲った。

「おいおい！大丈夫かよ！？」

目に埃が入らないように片手で顔を庇いながら零人が言うと、レイチエルはあの勝負の時の鋭い瞳になりながら言った。

「我が第一番騎士団『ディア・ロイン』の副団長、わたしが心から背を預けられる者が、彼女なのだ。負けるなんて事はない」

女性が撃つ弾を少女はことごとく薙ぎ払う。差をドンドンと縮めて行くが、女性は焦った表情も見せない。銃口をずらすことなくミリスに向けている。

鳴り続ける音。耳に直接響き渡るようだ。

突然、少女の大剣が輝き出した。まるでレイチエルの剣の色違いのように、緑色に。

銃の光る弾丸を的確に避けながら距離を素早く詰める。タイミングを掴んで飛び上がると少女は大剣を女性に振り下ろした。

「……ド」

女性は持っていた双銃から刃を出し、その攻撃を真っ向から受け止める。

その刃はまるで「エクシール…」その物だった。出す要は違っても、その刃はエクシール。光り輝く二つの刃は打ち合い、その輝きを増して行く。

「援護するわ！ライトニング・ドライト！」

エインのグローブから放たれた雷撃は女性に直撃する。しかし、刃が吸い取るように魔法を消し、女性には焦げ跡が見付からない。後方のエインに気付いた女は向きを変えると驚くほど速く移動す

る。

「……………え？」

斬られると構えていたエインの口から間抜けな声が漏れる。

「俺を…忘れんなよ！」

女の刃を弾き返すとエクシールを構え敵の動きを見る。

「レ、レイト……早く助けないさいよ、ばかあ！」

「おいおい、助けたのにそれはないんじゃないか!？」

「アンタはあたしを助けなきゃ駄目なの！」

強気になっていいる瞳から涙が零れる。相当怖かったんだろう。腰が抜けたのかその場に座り込んで声を上げる。

「訳わかんねつつ!!」

斬りかかって来る女の攻撃を受け止める。地面にひびが入るんじゃないかと思える衝撃が全身を駆け抜けた。

「貴様を…殺す…」

「何訳のわかんねえ事言つてやがる！」

剣を弾くと女に向かって剣を振る。瞬時に姿が消え、何時の間にか距離を取っている。人間では有り得ない速さ。しかし、レイチェルの剣の捌きや、エインの魔法を見ていて慣れてしまっている自分がいた。

刃は、エクシールと同じだったら変えられる。あのミリスと呼ばれていた子と闘っていた時は手を抜いていたのか。それとも、銃で全力で押し切っていたのか。無表情が感情を顔に出してくれない。

女の足元から音がした。俊敏に剣を構え、見切ろうとする。

「遅いな」

背後から聞こえた小さな声。そして、銃撃音。

「……………あ…」

体が動かない。立っている足に力が回らない。叫びも出ない。

胸元にある小さな穴。そこから、血が流れ出ている。そのまま、石で出来た屋上の床に顔から倒れる。胸が熱い。頭を打ったのか頭痛がする。

「レ……レイト……？」

どんどんと、堕ちてゆく。意識が途切れる寸前聞こえた響き。それは、エインが自分の名前を呼ぶ声と、剣と剣が交差して聞こえた耳障りな音だった。

第18ページ……絶望を悲しみに（後書き）

レイトくんの大ピーチ！

「へわわ、ここはどこですか〜!？」

うわっ！誰々！……って赤髪の貴方ですか。

ドジッ娘代表&2007年ロリコン代表の白魔術師さん。

「な、なんですかそれは？」

気にしないで宜しい。これ読んで。

「は、はい。

なぞのじよせいにじゅうでうっ！↑（舌嚙んだ

ひははんだ〜（涙）」

真面目にやる気あるのかいこの子。

し、仕方ないですね。いつもの調子でレイチェルさん、頼みます。

「あ、ああ。謎の女に銃で撃たれたレイト。レイトの身は？そして、
進入して来た謎の女性为一体……。

次回、『涙の秘密』！輝け、希望のJustice!」

やっぱりしつくりくるなあ〜。

「ひうう〜！ひはひはい〜！（舌痛い）」

第19ページ……レクイエム（前書き）

うわー、物凄い久々の投票になってしまった…。

やっと19話目。今回のお話からは、結構シリアスになってしまいます。

張り切って、どうぞ。

第19ページ…レクイエム

「っ！あの女を逃がして…しかもレイトが…」

この世界では少し珍しい黒髪の少女が握り拳を机に叩き付ける。

「なんて様だ…。くそ、これもわたしが弱いせいだ…！」

無様だ。たった一人の武者が引き連れた戦闘力のない妖精の戦争軍が、まさかここまでするとは思わなかった。被害は…一言で言えば莫大だ。今攻められたら、きつと負傷者だらけのこの王国は壊滅してしまう。

そしてもう一つ、武器の攻撃を受けた零人が一週間以上眠り続けている事だ。

何をしても動かない。食事は…魔法で栄養を取らせるしかなかった。料理を、魔法で直接胃袋に送る。しかし、それには危険が伴った。零人の体は魔法を受け付けず、無理に使おうとすると吐き出してしまう。

それから、口に食べ物を直接ゼリー状の物体にして入れるようになった。

水は、普通に飲めたらしい。そう、らしいだ。魔法がさっぱりな自分には、何も出来ない。

「…はは、何も出来ないとは…辛い物だな…くそ…」

今回の戦闘で、一番の被害者と言っても良い。ほぼ、いや、植物状態なのだから。

「レイチエル様」

後ろのドアが開いてローブを羽織った少女が入ってくる。

「エインか…、どうしたのだ…」

「姫様がレイチエル様を診てきてくれと頼まれましたので。それと

――
急に気まずそうにしていたエインの顔が強張る。じっとレイチエルを見てこう言った。

「…近々、精霊軍はここ、クレベルディアを陥没させに来ます」
レイチエルは零人の顔を見ながら「そうか」と情けない表情を
する。

エインは寝ている零人に近づいて行く。エインが料理を持って来
た事に気付くと、レイチエルは居た堪れなくなつて、病室から逃げ
るように走り出た。

声を掛ける間もなくレイチエルが開けて出て行つたドアから視線
を外し、苦痛に歪んでいるような表情をしている零人の頬に触れる。
「もう…情けない顔、してるんじゃないの、馬鹿レイト。ご飯、食
べよっか」

声は…返つて来ない。エインの涙腺から、少しだけ透明の雫が零
れ落ちた。雫は、少しだが、料理の中に染み込んでいった。

顔を片手で隠しながら、自分の部屋まで走つて行く。

情けない情けない情けない情けない。助けられなかった
ばかりでなく、看病も出来ない。剣しか振れない。なにより、同
情しているようなエインの表情が辛かった。

自室のドアを開け、素早く閉めると、ドアに背中をつける。

「…う…うう」

気が緩まつたのか涙が溢れ出て来る。両手で涙を止めようとする
が、流れ出てくる涙を止められない。

もし、レイトの目が覚めなくなつたら、きっと自分は騎士の誓い
で死ぬだろう。『騎士足る者、全てを守り抜く。それが、出来ない
時、それは死ぬ時だ』誰の言葉かも覚えていない記憶の欠片。しか
し、その欠片に自分の運命を預けてしまう。

これは駄目な証拠なのだろうか？自分は何も出来なくてここで少
しずつやつれて行くレイトを見守るだけなのだろうか。

「それなら…わたしは…」

部屋の片隅に置いてある鞘に納まった剣を引き抜き、夕日に染まり始めた太陽に向かって掲げる。鳥が部屋の前を羽ばたいて行く。
「最後まで、わたしは、騎士として…剣士として生きよう。もし、わたしが死ぬ時は…自分の誓いを貫けなかった時だ」

鞘に剣を収め直し、涙を拭う。

入って来た扉を開け、レイチエルは歩き始めた。気に入っていた帽子と、零人から受け取ったジャンバーをベットのの上に置いて。

その後、エルフの100万大隊に突っ込んで行く人影があったという報告が伝達班から伝わってきた。エインはその報告を受けて大慌てでレイチエルの部屋に向かっていった。帰って来るまでの時間はさほどなかっただろう。

「レイチエル様の部屋に…これが」

ベレンスの机に置かれたのは、紛れもない親友が嬉しそうに被っていた帽子と、赤い不思議な作りのジャンバー。どちらも、レイチエルの部屋のベットのの上にぽつんと寂しそうに置いてあったそうだ。
「まさか…大隊に向かっていったのは…」

「…心苦しいですが、報告には…一本の剣を腰に据えた者だったと」
「で、でも！それがレイチエルだって事は——」

ベレンスが言おうとした言葉にエインは首を横に振る。どう考えても、レイチエル以外、そんな事をする者がいるとは思えない。それに、普通の感情で100万の大隊で向かって行くだろうか。あの出て行った時の反応と照らし合わせれば、もう何も言えなかった。
「だ、だったらレイチエルを救出に！」

「落ち着いて下さい姫様。噂は早朝届きました…。100万の大隊に挑み、無事で居たら…きっと帰還しているでしょう」

ベレンスはがくりと身を地面に力なく倒してしまう。

「姫様！」

緊張が張り詰めてしまったベレンスの意識は、ずっと、霧がかか
るように落ちていった。

第19ページ……レクイエム（後書き）

眠いので……後書きは今回は抜きで申し訳ありません。
次回では書きますので。

第20ページ……エルフ進行（前書き）

さあさあさあ、結構間をあけたああああ~~~~！

で、ですが、ちゃんとやりました！

ほめて頂けると嬉しい限りだったw

第20ページ……エルフ進行

「……あれか。エルフ進行軍」

身を隠そうとしたマントは出くわしてしまったモンスターとの戦闘中に破け、腰に据えた剣は鞘にその身を隠してはいるが、それでは意味がない。

何時もは帽子で隠されている上の髪も風に揺れていた。

崖の上から見る人込みは、まるで緑色の森が自ら進行しているようにも見えた。

面白い。少女が考えた思考は、目の前の光景に狂ってしまったようにも思える。しかし、体の中が熱い。あの大群が、どれだけ自分を本気にしてくれるかが楽しみになってくる。裾の短い上着とタイツが隠している背中。そこが異様なほど疼く。

恐れはない。ただ、目の間にいる軍勢が、自分を高めてくれる玩具のように見えた。

「さて……エルフはどれほどの物か、見極めさせて貰おうか。クレベルディアを、ここまで攻めた力」

崖を走り降りる。

一人のエルフが気付いたのか、エルフ軍がざわめき、途端に炎や氷、風、雷の魔法が次々に飛んで来る。しかし、彼女はその魔法を軽々と避けて行く。その動きは、瞬間移動と言ったらいいだろうか？

崖の下、一人の杖を構えていたエルフを斬り捨てる。

「我が名はレイチエル。レイチエル・カルマ！我が名を知り、掛かって来れる者がいるなら掛かって来い！全て相手をしてやろう！」

夜にはまだ遠い夕日が、まるでその時の惨劇を見せているようだった。

「エルフ全軍、クレベルディアに進行中との報告！」

「隠密部隊の過半数が敵に殺されたという…報告が」

耳に入って来るのは、兵が減った。進軍されている。全てが胸を痛める報告だった。それが、本当に絶え間なく兵から聞かされる。精神が狂いそうになるのを魔力を多く循環させる事で抑える。

「……わかりました…」

こんな言葉がさつきからずっと口から漏れている。ベレンスは頭を抱えると足りなくなった魔力を補う為、体をぐったりとさせて休ませる。

レイチエルがいなくなつた。その事で軍は動揺し、今までの力を失いつつある。そして、エルフ軍の予想以上に早い侵攻。絶対絶命か、それとも四面楚歌という言葉が似合う状況下だった。

「…もう、駄目なのかな…」

強がつてた口調が、兵士の居なくなつた部屋で突然泣き声に変わる。

エルフ軍の侵攻。そして、考えたくないレイチエルの行方。あの、親友の剣士が、そんな簡単に死ぬ筈ないと首を振るが、顔は沈んでいた。心の隅では…嫌な事を考えてしまっている。そんな自分が嫌で堪らない。今でもレイチエルは何処かで生きている。そう思うしかない事に苛立ちがこみ上げる。

「諦めるのは、良くないと思います。姫様」

「っ!？」

部屋の隅から聞こえる声に体が震え上がった。

「ふふ、驚かせてしまいましたか？」

綺麗な腰までのアメジスト色の髪が歩きに揃うように揺れて幻想的な風を思わせる。部屋に差し込む赤い夕日と同じ色の赤いルビーのような瞳。ローブを着込んでいる。その姿は、みたままの魔術師しかし、エインより魔力が高いのが一目でわかる。

「お、驚かさないで下さい…」

驚愕の顔から暗く沈んだ顔へ直ぐに逆戻りをしてしまう。

「いえ、報告を。わたしの部隊、『ウイード・ロイス』が中部隊を破りました。それと、少々ですが、大部隊にも傷跡を。それと――」

少し間を開けると、彼女は言った。

「カルマさんの暴れた後が、ちゃんと痕として残っていましたよ」
それを聞くと、沈んでいたベレンスの顔に焦りが出る。

「れ、レイチエルが!？」

「…話を聞いて下さい姫様。わたしは『痕が残っていた』と言ったのです」

ルビー色の、同じ色の瞳が自分を映す。

「心苦しいですが…わたし達が攻め入った場所。崖の下に…大量の血が、血痕で残っていました」

再びベレンスの体が椅子に崩れ落ちる。

…駄目ダツタ。レイチエルはもうイナイ。死んでシマツタ。

「そして…」そつと目を瞑ると、彼女の口からゆつくりと呟かれる言葉に、ベレンスは涙を流した。きつと、悪い感じではなかったと思っている。

「その血痕を調査したところ、カルマさんと同一の血痕は見付かりませんでした」
ディバイス

「…寝ちゃった…の…?」

エインが少しずつ目を開けると、安らかに眠っている零人の顔が最初に飛び込んで来た。

「…まだ、寝てるんだ…」

二日寝てないのが、やっぱり来てる事を自覚する。着ている衣服を直し始める。赤い、夕日のような奇妙な服。ローブの代わりに、エインはそれを羽織っていた。軽いし、少し暖かいからだ。

「…レイト」

短く、小さく、目の前で眠っているバカの名前を呼ぶ。

最初、弾丸で撃たれた傷と破れた服は、魔法で治ってしまう。しかし、精神はどうにもならない現実がある。

「今日ね。アンタにずっと、付き添ってあげたのよ？…そりゃ、ちよつと寝ちゃったけど」

朝から零人の顔を見続けて、少し時間感覚が狂ってしまったかも知れない。

「ホント…バカみたい。アンタじゃなくてあたし…だけどね」

溜め息を吐いて、零人の顔をじっと見詰める。

「早く、起きなさいよね…。言つてやりたい事、いっぱいいっぱいあるん…だから」

微笑みながらベット越しに体を擦る。

少しだけたつただろうか。いきなり、病室にも耳煩く聞こえるほど、大きな緊急指令の鐘が鳴り出した。

「っ！え、エルフ軍、もう進行してきたの！？」

素早く椅子から立つと、病室の扉を開ける。

——そうだ。言つの忘れてた。そう思い、こんな状況でも寝付いてる零人に近づく。その額を軽く人差し指でデコピンする。

「あたしは…帰って来るからね。帰って来たら…あたしを出迎えてよ？」

そう言つと、身勝手に病室から走り出していったエイン。

ベットの上に掛けておいたレイチェルの帽子がボトッと落ちて、零人の顔に被さっていた。

第20ページ：…エルフ進行（後書き）

さて、如何だったでしょうか？

聖なる。なに結構はまっていたりする水無河です。

ま、レイチエルはメインヒロインなんですが…エイン可愛くなって
ると思いませんか？

そりゃ作者のお気に入りキャラですから（えへん）

まあ、そろそろ中盤でございます。

今回の題は『特攻』という感じでした。

第21ページ…エクシール

予測が悪い方に当たったと言ったら良いだろうか。

「…凄い数…」

震えが走るほどに威圧感がある大隊。しかし、数は報告にあったほど多くないようにも見える。

「…レイチエル様」

きつと、彼女がやってくれたのだろう。

作戦は、もう伝えられて笑える物だった。それは、良い言い方をすれば真っ向勝負。悪い言い方をすれば迎え撃ち。こちらは戦力的にまずい状況下にいる。

敵軍はエルフ。弓にも魔法にも長け過ぎている異種族だ。

「魔法で人間が、エルフに勝てるのでしょうか」

後方にいる緑髪の少女に問い掛ける。

「魔法で…ですか？」

ゆっくりとその問い掛けに答えるミリス。

エインがグローブに付いている宝石に手を添える。足音が聞こえると添えてる手にミリスが手を乗せて来た。

「…貴方を…守りましょう。この…剣が…盾になりましょう」

安心して下さいと言っているような言葉に、戦場で笑いが漏れた。きつと、この人も口下手なのだろう。黄色い瞳が不思議そうに自分を見ている事に気が付く。

「いえ、ありがとうございます。ミリス様」

一礼すると目の前でミリスが首を振る。

「ミリスで…良い。エイン」

この子は、何でこんなにも感情を顔に出さなくなってしまったのか。そんな事を考える前に、敵が見えた事を知らせる…サイレンが鳴り出した。

「遅れないで…下さい」と言うとミリスは背中に背負っていた剣を

引き抜き、兵達の前で掲げた。

きつと、それがわたしの急遽入らされたディア・ロインの戦闘開始のサインなのだろう。

兵達は勇敢に我先にと武器を手に走って行く。

「これから見る…戦場に…目を奪われては…駄目。きつと…今まで…貴方が見た戦争は…遊びだから…」

これから始まるのは…なんなのだろう。

戦争？奪い合い？憎しみ合い？

なら、あたしはどれも選ばない。レイチエル様が命を賭けて守ろうとした国だから、レイトがそこにいるから。

「あたしは…生きるんだからっ」

見渡す限りの暗闇。その中に、一つだけの足音。

零人は辺りを警戒しながら歩みを進めて行く。

少しの間歩いていてなんとなくわかって来た。何もなく、音もどこかに引き込まれてしまう。どうしても出る方法が思い浮かばないいや、ここには出る方法なんてないのだろう。

「そうだ、俺は…あの女に撃たれて…」

ここは死後の世界なのだろうか？そんな事考えた事もない。ただ、やっぱりそういう事なのだろうか。

「ゲームだったら、GAME OVERってところかな…」

情けないにもほどがある。勝つどころか、しくじって死んでいる始末。そして、帰れてない。大体、あれは夢だったのかも知れない。あんな事あってたまるか。

「……全部、ユメ…だったのかな…」

暗黒の空を見上げながら、目を瞑る。ふと浮かんできたのは、姫に貰った剣、エクシールだった。驚いて目を開けると、そこには輝きながら自分の回りを回る剣があった。

『我が主よ』

開いた口が塞がらない。

その声は間違いなく剣から発せられていた。

「お前は…」

『そう。貴方の信念を貫く為、そして、貴方の未来を護る為に紡ぎ出された剣だ』

もしかしたら、これも夢なのだろうかと考えていると、エクシールが輝き出す。

眩しさで目が開けられない。少しの間してから目をそっと開けると、目の前にはエクシールと同じ、空色の髪を持った少女が浮かんでいた。そつとあるのかわからない地面に少女の足が降り立つ。

開いた瞳。それは、鋼のような銀の右目に、赤い瞳。それは、誰も寄せ付けないような感覚を持たされるような、危険な瞳だった。

「……？」

首を傾げながら零人を見て来る。

「君…誰？」

どうやら、知らない人に少し怯えているようだ。

しかし、なんで自分だけしかいなかったように見えた世界に少女いきなり剣から出て来たのだろうか疑問が浮かぶ。

「なんで…わたしの世界に君が…いるの…？」

「えっと、俺は」

子供は余り慣れないが、外見から見ると小学生くらいだろうか？
こっいう子にはまず自己紹介からした方が良いかと考え零人は笑い掛けた。

「雨笠 零人」

零人が名前を言うと少女は首を傾げる。

「俺の名前。自己紹介した方が良いかと思つて、な？君は？」

「…わたし、名前…ない」

静かな声で言つて来た言葉は上手く理解出来ない物だった。名前がないと言つ事は、記憶喪失とかそんなんだろうか。だったら、な

んでエクシールから出てきたのだろう？そして、剣の時は自分を知っているような物言いだったのに、なぜ今はこうなのだろう。

言っても無駄だと考えた零人はこういった。「なんで名前がないの？」

「…わからない」

「家族とか、友達も？」

「…わからない」

「…わかった。友達がいないなら作ろうじゃないか」

零人が急に言った言葉に彼女は混乱しているようだった。

ゆつくりと、怖がられないように彼女の手をとり、優しく握る。

「こんな暗い世界、君には駄目だ。一緒に、どう出ようか探そう？それで、もし出られたら…俺の知り合い、紹介してやるよ」

知り合いって言ったら…夢かも知れなかったと馬鹿な事を思ってしまった、剣士と魔法使いと、お姫様と、これから仲良くなる人。

そうだ。俺が知ってるだけでこの子が幸せになるとは限らない。

「一緒に…幸せ探し、しよっか？」

自分でも齒が浮く言葉を口に出してしまった。

「トモ…ダチ？」

「そう、友達」

微笑みながら少女の言った言葉に相槌を打って繰り返す。

「で、でも…わたし…この世界から出られない…」

「だったら、一緒に出よう？俺も一人じゃ出られないかも知れないけど、君がいたら出られそうな気がするんだ。駄目かな？」

「…わたし…連れて行って…くれる？」

彼女が首を傾げながら言うと、零人は手を少女の頭に伸ばした。

少し震えたが、少女は手を受け止めてくれる。サラサラな空色の髪。抱きしめたいと思ってしまうほど、可愛く華奢なその子。

恥ずかしそうに俯く少女に零人は「ああ」と短く小さく言った。

「嬉しい…レイトくん」

少女が恥ずかしがりながら言った自分の名前が、零人の心の中に

響いた。

「レイト、くん？」

「だ、駄目かな…？」

「いや、俺の知り合いの、一人の例外以外は俺を呼捨てだからな」
可愛い外見の少女にくん付けされて心が躍る。これが萌えというやつなら悪いくはない。むしろ大歓迎だ。

「…華奢」

零人が呟くと少女は不思議そうに首を傾げた。

「君の名前。どうかな？華奢って」

「キャ…シャ？」

呪文のようにその言葉を繰り返す少女に、零人は相槌を打つ。

「キャシャ…素敵な名前…」

「そ、そうか？」

物凄くネーミングセンスを疑う名前だと自分でも思ったが、少女は気に入ってくれたようだ。空色の髪を揺らしながら、怯えていた顔に笑顔を見せてくれる。

少女の笑顔が輝き始める。

「レイト…くん。この世界から、一緒に…出てくれる…？」

少し不安そうになりながら手を差し出してくる華奢。

零人は手を握って言った。「当たり前だ」と、笑いながら。

第21ページ……エクシール（後書き）

ふう、やっと更新……死にそう……
っ、疲れてる……！

しかし！これで21話目更新！

「ほう、結構やろうと思えば出来る物だな」

かなりのスランプとの合戦がありましたかね。
さてさて、次回もお楽しみにです。

「輝け、希望のJustice！」

第22ページ：：争いは戦争へ

手のグローブに向け魔力を練り上げ、それを目の前の敵に向かって放つ。

しかし、直ぐにそれ以上の魔法が何発も返って来てクレベルディア軍の中心核へと向かってくる。

「守ると…言っただけ！」

炎や氷、その他の魔法を先陣に立って斬り捨てる緑髪の剣士。

体以上の大きさの大剣を軽々と振り回して、魔法を斬り、隙を突いて敵の数を減らして行く。それは、勇敢という心からではないだろう。きっと、表情が見えなくても国を守りたいと思っている、そうに違いない。

レイチエル様が、そうだったんだから。

弓が飛んで、兵士がドンドンと倒れて行く。歩み、剣の振るいを止める兵士はいない。

これが、戦場。ひやりとするほど悲しく、自分を忘れかける戦い。呪文を小声で紡ぎ、手を大振りして風のカマイタチを創り出す。

それは目の前のラインにいたエルフを吹き飛ばし、切り刻んで行く。

「クロス…アルセイド」

静かな声と共に近くで爆風が巻き起こる。ミリスが出した大爆発のような剣が敵を薙いでいた。鋭い疾風が敵を吹き飛ばしながら斬り刻む。

そんな時、戦場下で出る筈の悲鳴が、クレベルディアの軍からしが上がっていない事に気付く。エルフの一人を見ると、目が黒いなんて物ではなく、気味が悪いほどに染まっていた。

「エイン…前…？」

エインに飛んで来た火の弾丸を斬り消しながらミリスも気付いたようだ。

『敵の異様さ』に。切り倒されても悲鳴を上げない。瞳には命の息

吹さえないようにも見える。まるで、生気をどこかで吸い取られて来たような感じだった。

「様子…構っている…余裕…ない」

「その通りですね。ディア・ロイン副隊長」

いきなり聞こえた声には、こんな状態にも関わらず笑みも混じっている感じがする。

「カティー…貴方も前線に…いたのですか」

ミリスの表情が呆れたように崩れる。

「ウィエード・ロイスは魔法の専門隊ですから。それに、隊長から率先していかないと、部隊の皆さんの活力が下がってしまいますしね。貴方もそれを考えたのでしょうか？」

微笑みながら強力な防御魔法を軍の全体に張り巡らせる女性。魔法で浮かんだアメジストの髪が揺れている。

エインが造作もないように高度な魔法を完成させたカティーを驚いて見ていると、その相手は裏のないような笑顔で笑う。

「ふふ、隊長となれば、これくらいオチャノコサイサイなんですよ」

「魔力…勿体無い」

「っ来ます！」

零人のジャンバーをひるがえ翻すと片手を目の前に突き出す。

「…喰らいなさい。これが、あたしの、最大火力よ！」

前線に走り駆けて並ぶと最前列へ素早く移動し、赤い波動が効いた左手を一体のエルフの腹部に拳で捻り込む。ドンツと音がし、辺りが焼け野原と化した。味方の軍はカティーと呼ばれた魔導師がシールドを張ってくれている。

エルフ軍は後ろからゾロゾロと湧き出すように現れて来る。

「ハア…こ、これじゃ…駄目、なの？」

焼け落ちるんじゃないかと思えるほどの激痛を抱えた左手を抑えて後方に飛ぶ。

他の騎士達が槍や剣を手に、エインの魔法を合図のように動き出した。さっきまで同レベルだった交戦が、クレベルディア軍が押し

始めたのだ。もう腕の痛みも忘れてしまっただけ嬉しかった。

「エイン…大丈夫？」

ミリスがエインの隣に並び、痛む手を擦る。

「こ、この程度、大丈夫…！ミリス！構わず攻めて！」

エインが上司に命令するような形になっていたが、ミリスは無表情で「…了解」と一言言くと、最前線へ大剣を構え突進して行った。腕を抑えて近場の岩陰駆け寄り、座る。腕が交換したいほど熱くなっている。

「つつ…」

涙を抑えて今を見守る。軍の兵士達が、剣でエルフ達を切倒して行く。それが正しいのかはわからない。だけど、今はこの時を生き残るのが最善なのだ。

腕の痛みで気を取られていたからか、わりかし近くになるまでその足音に気付かなかった。

「わわ！大丈夫ですか！？」

声を掛けられても余り気が回らない。流石にさっきのはやり過ぎたと少し後悔している。

「じつとしていて下さい！」痛む腕の方の袖を少女が捲り上げると、少し楽になったような気がした。さっきの魔法の反動は出した分だけ。その言葉の通りだ。反動が自分にも返って来る。きっと、腕は火傷ではすまされないだろう。

パラパラと音がすると火傷の箇所が優しい冷たさに包まれる。

「少し冷やします！ブライデ・アイ・フェレン・アイス・フェイフオン・ディテネキュア！」

素早い詠唱が終わるとすっと痛みが消えた。体中の汗がすうっと引いて行くのがわかる。

しかし――、

「冷たい！ドを超えてる！もう違う意味で痛いわよ！」

腕を強く振ると掴んでいた手が離れてかろうじて手は利くという感じだった。

手を掴んでいた人物を見ると腕を振った時に転んでしまったのか
屍餅がついていた。長いローブを着こんではいるが、転んだせいで
黒いストッキングが見えている。そして、服装は魔法学校を着てい
るエインの格好と同じだった。

目を引くのは首の上だ。燃え上がるようなストレートセミロング
の赤髪に、湖を思わせる青く大きい瞳。白いミルクのような肌。そ
して、赤い髪に付いている飾りのような――可愛い犬耳。

「ま…また直ぐに起きた…あの人とおんなじ…」

「直ぐ起きなきゃ危ないでしょ!? このお耳は飾りなの!?!」

近寄って苛立ちを犬耳にぶつける。グーっと上へ伸ばす。「わふ
ーっ!?!」

右へ、左へ、回転回転。「や、やめてくださいー!」

飾りではない事を確認すると手を離して少し彼女から離れる。

「それに、貴方一般人でしょ? こんな所にいたら危ないわよ」

「へ、へう。テイルは迷ってしましまして…いつの間にかこんな所
にきてしまったのです」

つまり迷子なのと聞くのをぐつと堪える。きっとそれを言ったら
目の前で半分泣いているこの子は泣くだろう。

「今直ぐ逃げなさい。貴方みたいな人はすぐ死ぬ――」

エインが言い終わる前に自分をテイルと呼んだ子が抱き着いて来
て一緒に転ぶ。

何をするのと文句を言う気も出なかった。銃撃音が近くで聞こえ
るとエインが立っていた場所に雨のように弾丸が降り注いだからだ。
視線を崖の上にと上げると「やつぱり…」と言葉を漏らす。

「はわわ! な、なんですか! あれ!?!」

それを察知していた筈のテイルが一番驚いている。

崖の上に立っているのは前に戦った時とは違う服装、白いジャケ
ットを羽織り、大きい黒シャツを着込んだ桃色の髪の女性だった。
その瞳は崖からもわかるほど、鋭い紫に輝いていた。

「…オトコは…どうした」

女性は高い崖からなんなく飛び降りるとエインに問い掛けて来た。

「まだ生命は残っている」

「だから何よ。またレイトを狙いにきたの？お生憎様。レイトはここにはいないわ」

エインの足は強気な言葉に反して震えていた。目の前にいる女性の目付きは無表情だが、ミリスのように何かが伝わって来る。

零人がここにいないとわかると女性は明らかにクレベルディア王国の方向へと足を向ける。

その時、女性の横を雷がすり抜けて行った。

「待ちなさい」

こちらの戦意を感じ取ったのか女性の手にはいつの間にか銃が二丁握られていた。

「テイルって言ったっけ？下がってなさい」

手のグローブに埋め込まれている宝玉が輝きを増して行く。

「わたしに勝てるって…思っているのか」

「二度も負けると思わないで。あたしは…誰に助けられなくても生きるんだから！あたしには、魔法しかないんだから…絶対に負ける訳にはいかないの！」

第22ページ：…争いは戦争へ（後書き）

さてさてさて、聖。るかなをやりまくりサボっているかもしれない斑鳩です。

えっとペンネームを変更いたしました。

何卒、宜しく、お願いします。

アセ。ア…やってないなあと思いつつ、CDを聞きながら書いた今回。

いや、嵌っているゲームや音楽で書く感覚も違うんですなこれが。僕は最近「TAO」に嵌ってしまって、これを聴かなきゃやってらんないぜーみたいな感じに…。

まあまあ、無駄話は置いておいて、今回もエインが目立っております。

ミリス好き、エイン好きな方にはたまらない今回です。

まあ、実際問題結構引き伸ばすつもりなんですがね。

いや、最近アイデアが沸くように出てくるんです。

ゲームをするのを減らしつつ小説小説と奮闘の毎日です。

仕事にしてみたいなあなんて思わなかったり…。

えっと、見てくださった方、これから宜しくです。

いやあ…こんな長い後書きを読んで下さり、有難い限りの斑鳩 エイジでした！

第23ページ……悪魔の鎌（前書き）

元作「ルナベル」をお読みだった方！
お待たせ致しました！

テイル！再参戦でございます！

第23ページ：：悪魔の鎌

「邪魔をするならば、容赦はしません」

零人を撃ち抜いた白い銃を構えて静かに言う女。エインは顔を両手で叩いて気合を入れるといわゆる格闘スタイルという物を取った。「されなくて結構よ！」

女の放った弾丸が合図のようにエインは琥珀色に光る自分を覆うシールドを創り出す。チュインと激しい音がすると同時に匹敵するほどの衝撃がシールドを突き抜ける。

何回も何回も止めを刺すように女の銃から火花が散る。

銃口から白い煙が吹く。しかし、銃口はエインがいた場所から離さない。

「どこ、見てるのよ！」

煙を囫にして移動していたエインのヒールの踵かかとが女の脇腹に減り込む。

体を大振りに回すと肩にもう一方の踵を繰り出す。それがクリーンヒットした事を確認するように、地面に降り立った後バックステップで下がる。

「…少しは強くなったようですね」

血を口から流しながら呟く女にエインは戦闘態勢を取りながら「レイトから盗んだのよ」と微笑んだ。

「リイナ・アビルレイ。わたしの名前です」

「エイン・デイ・バル。大魔導師になる名前よ」

リイナは銃口を地面にバツと向ける。すると、自分を狙った光る刃が形を創っていく。

震えがまだ続いているが、負ける訳にはいかないと自分を震え立たせる。

目で追うのもやつの速度で一直線に向かって来るリイナに対してエインは拳を赤く、オーラを纏わせるように光らせていく。腕を

後ろへ下げ、振り被る。

リイナの振った刃とエインが力一杯振るった拳が反発し合う。
オーラを放っていた拳が輝き、リイナの刃をへし折る。だが、エインの拳からも痛々しい音が上がる。

「う、く…まだよ！」

手の骨が折れた事を知っていながらも、エインは手を前に向ける。
「今度は、こちらから行きましょうか」

しかし、手に向けた方向に、リイナはいなかった。

「力を抑えた方が良かったでしょう？まだ半分出ただけですよ？」

「っ！」

振り向いたと同時に腹部に膝蹴りが入る。エインが出した横蹴りとは比べ物にならないほど重い蹴りが体を吹き飛ばす。

「これくらいで…終わると思いますか？」

意識が飛びそうなほど痛む腹部。それを追撃するように吹き飛んでいる体に弾丸が幾つも擦れていく。血が吹き出て、その箇所が熱い。そんな場所が体のあちこちに増えて行く。

岩に背中から当たり視界が一瞬だけ白く染まる。

銃撃音がし、死を覚悟した時、目の前に同じ服装をした少女が立っていた。

「テイルだって魔法使いです！シールドくらい、ちゃんとやれます！」

本を片手に素早く詠唱をすると弾丸を粉々に粉碎する。

「応急処置ですが、我慢して下さい。今はこれくらいしか出来ません」

エインに手向けると目を瞑り、呪文を唱えるテイル。

リイナが銃を両手に走って来て、それを伝えようとするが、言葉にならないうめきを上げてしまう。シールドを斬ろうとしたリイナの体がいきなり弾かれたように横に飛ぶ。

見ると、そこには面倒そうに火を小さく吹くかなり小さい赤いド

ラゴンが立っていた。

「サマラン！抑えるだけで良いから、出来るだけ相手をして！」

それだけ言うとテイルが回復魔法を再開する。

きつと、あのサマランと呼ばれた竜は使い魔なのだろう。体が小さい上に攻撃力が高い敵に戸惑っているリイナに見向きをせず、呪文にテイルは集中している。

そんな時、テイルが首に付けている首輪のような物がパキンと音を立てて壊れた。すると、目を疑う事が起きる。ドンドンと、その体が成長していくのだ。それも急激に。

胸はそのままだが、他は大人の女性といえるに相応しい体をしているテイルが現れてエインは空気が足りない金魚のようになる。ピンクのサンダルのような靴の音を鳴らせて地面に足を着くとテイルはエインに微笑んだ。

「手の骨、傷痕の数箇所を治癒しました。行けますか？」

その返答のようにエインは立ち上がり、テイルのシルドを擦り抜けて行く。

なるべく、今の事は考えないようにしながら、リイナとの距離を縮めて行く。ドラゴンに気を取られているリイナの背中に向け、風の鎌を放つ。

軽い身のこなしでそれを避けると「治って来ましたか…」と無表情で言ってくる。

ドラゴンも限界が近いのか息が荒い。

「サマラン！もう良いよ！戻って！」

限界と察したのか、声色が変わったテイルがドラゴンを光にして本の中に戻す。

「やっぱり…見間違いじゃなかったんだ」

「あはは、いつもは魔力が強過ぎちゃって魔力を抑えているんですよ。それと、魔力を抑えると同時に体の成長を止めちゃうんですね」

本を片手で掴むとテイルは片手を前に突き出す。

「優しい風の精霊よ。我が手に集まり、その力を示して…カッター・ウインド！」

さっき自分が出した魔法の何十倍もする魔力を込められた風の鎌がリイナの刃に鋭く当たる。ガインと音を響かせると鎌は消え、ひびが入った刃が残っていた。

「…やりますね。まさか今の刃にひびを入れるとは」

「えへへ、驚くでしょ。これ結構練習したんだから！こんなに大きくなるとは思わなかったけどね」

リイナが銃を軽く振ると刃が新たに出現する。

「楽しめそうですね。オトコでは物足りないとは思っていましたが」
グロープに魔力を込めると敵に構えて微笑む。

これが本当の形勢逆転というやつだろう。

「少し…手を抜き過ぎていました。貴方達には、これを見せても良いでしょう」

勝ったと確信しているエインにはただの時間稼ぎにしか思えない言葉。

リイナの目付きが鋭いものへと変わり、肌がピリピリと痛む感覚を覚えてしまう。殺気という物だろうか。それが凄く響いている。

少し、誰も動かない状況が続いていると、リイナが驚く行動をした。

「っは！…！」

その手に握られた銃を、素手で割ったのだ。

気が狂った衝動かとも思った。しかし、その考えは直ぐに消される。

リイナの手に、割れた銃の結晶が集まり形を創って行く。それは、元々あった物を再生するように、具現化していく。

「克蘭ベルス…貴方達の命を狩る者です。覚えて置きなさい」

克蘭ベルス、きつとあの紫色に光る鎌の事なのだろう。

テイルの足が少し竦んでいるのが視界に入る。見るだけでわかる。鎌から恐ろしいほどの、禍々しい気のような物が発せられているの

だ。嫌でも震えてしまっ

「今更、そんな事をしたって……無駄なんだからっ！」

炎の球体を創ると、それをリイナに向けて振るう。

「無駄だと……聞こえましたか？」

鎌を握っていない片方の手で魔力を込めた炎の弾を粉碎する。眼を凝らすと、その片方の手は、指一本だけしか立てられていなかった。

余りの事に言葉が詰まる。相手の色々な物が、桁違いになっているのだ。

「やっと、分かりましたか。力の差を。だけど、貴方は遅かった」

言葉が耳に入った時には、リイナがエインの前で鎌を構えていた。

「これが、『力』です！」

両手で鎌を振るうと避けたエインに衝撃波が及ぶ。

ジャンバー、服が所々破け、傷が何箇所もつけられて地面に体を引き摺られる。

掠^{かす}っただけなのに、血が出て傷が痛む。擦った腕が熱く火照って痛みを引き立たせる。テイルも、直撃は避けたがエインと同じようなダメージを受けていた。

「うっ……」

立つ事もやっと。腕を支えにしながら、足を震わせ立ち上がる。

「何をやっても、貴方は無意味です」

片手で鎌を振るうと軽い衝撃波がまたエインにぶつかる。ドンドンと衣服が破け、それを気に出来ないくらいの痛みが襲って来る。

息が危なくなってきた事が自分でもわかる。

「もう終わりですか……呆気ないとはこの事ですな」

小さく言っと、鎌を振り上げる音が聞こえた。

「レ……イト……」

第23ページ…：悪魔の鎌（後書き）

ふう〜、一日挟みで次話投稿…。

ああ、疲れた疲れた。

疲れたぞコンチキショオオー（ナル。ナ風）

とまあ、ハイテンションな訳ですが。

まあまあ、今回も戦闘ばっかりでございます。

元作のテイルちゃんが出てきまして…いやあ〜やっと思したか無名作者めと思われている方も多数かと。

新しい設定も増やし、テイルにはオプションも増やし…。ああ〜、良かった良かった！

「定められた運命に従うんじゃない。俺は俺だ」

望くんの言葉です。いやもう、かつこいいですね！

ナル。ナや色々な人が惚れるのがわかる！

とまあ、雑談も程ほどに今回はこんなもんにしときましようか。

次回も、よろしく願います。

第24ページ：：君の夢

「うおおおおおおおっ！」

走って来る音と煩いほどの声で、涙を出したくなるほど会いたかった人の声が聞こえた。

ザツとエインの視界の真上を通る青いズボン。それを、確かあいつはじーぱんと呼んでいた。その後にくよくように、エインの横を通り抜ける影。

刃の打ち合う音が聞こえると、目に砂が入りそうになるくらいの突風が吹く。

「着ましたか……」

声も出すのが辛かった。だからカッコイイ所で出てくるんじゃないわよと心の中で笑って、エインは静かに視界を閉じた。

華奢を連れて俺は闇を出た。久し振りに見た『世界』は、夕日に染まっても目に眩しかった。手で影を作って軽減する。

「レイトくん、ありがとう」

いきなり寝ているベッドの隣から声がして驚きながら横に視線を向けると、そこに裸の華奢が寝ていて吹いた。目が見開くのを堪える。

頭を撫でると華奢はくすぐったそうに笑った。

幸せって、こんな感じなんだろうなと実感し、ベッドの中に隠れている拳を握る。

青い髪がサラサラとしていて、触っていて心地が良い。赤と銀色の綺麗に澄んだ瞳が火照っている頬を一層輝かせているようだ。髪をずっと撫でていると布団で目の下の顔を隠してしまい、目の潤みが愛おしさが倍增する。

「言っただろ。一緒に出ようって」と頭に乗っていたタオルを取ると零人は華奢に笑顔を見せる。

誰もいないのかと周りを見渡そうとすると華奢がくいくいと袖を引っ張る。

その目は怯えてる事はなかった。真っ直ぐ零人を見詰め、口を動かす。

「レイトくん、近くに…闇に飲まれそうなエルフがいる。その人と戦っている人が二人。助けに行こう。やられちゃうよ」

「お、おう」

結構実行形なのかなと重いながらも、零人はベッドから飛び起きて撃たれた部分を確認する。どうやら貫通はしてないみたいだ。魔法でも出来ない事はあるだろうから少しおっかなびっくりだったりもする。

華奢が自分に続いて布団を出た時に零人は耳まで赤くなった。

体は幼いけれど、白く、細い腕や脚。ウエストも引き締まっただけで見惚れてしまう。一言で言えば全裸と言えるものだ。その中でも一番目を引いてしまったのが…胸の中心に刻まれている青い剣の紋章。それは痛々しい傷にも見えれば、華奢に相応しい体の一部のようない気もした。

「レ、レイトくん、あんまり見ないで…」

服がない事を気にしていたのか、彼女は手で直ぐに隠してしまう。「っ！ごめん！」

後ろを向くと背中に暖かい物を感じた。

少しすると、華奢が「いいよ」と言っただけで向き直る。

零人の服を、まるで縮小したような服を着ている華奢がいる。違うのはジーパンが膝の下までのショートパンツになっただけ。白い脚が、青いズボンで一層引き立っているのは秘密だ。

「わたし、魔法みたいな事が出来るの。これもその一つだよ」

少し赤くなりながら言う彼女に見惚れないようにしながら笑い返す。

裾を押さえながら俯く彼女を見て、零人は頭を掻いた。

「じゃあ…いこ、レイトくん」

分かっているように手を差し出すと、華奢はその手を握り、目を静かに閉じる。目を開いている零人の視界が歪む。それと同時に、堪えられなくなり、目を素早く閉じた。

次の瞬間には浮遊感と新しく見える情景。

岩場が立ち並び、視界の先には戦争を繰り広げている兵士達が武器を取り、何かと戦っていた。魔方阵から炎や氷、雷が出現し、それを紙のように斬って行く大剣持ちの少女と、巨大な魔方阵を一瞬で作るクレベルディア軍の魔法使い。

それは、物凄く怖くて、弓が刺さり倒れる兵士を見て鳥肌が立ってしまふくらいだ。

おいおい待ってくれ。俺、戦争なんてみたの初めてじゃないかなんて事を思ってしまう。

「レイトくん、こっち。こっちから闇の感覚がある」

同じスニーカーを履いた華奢は、零人の見ている方向と逆を指す。

「え、岩場…だよな」

「うん。向こうに、いるよ」

どうやら、奥に道が続いているらしい。

零人は裏腰に手を当てるとエクシールを握ろうとする。しかし、その手は、宙を握っていて、零人の口からは「ありゃ？」なんて間抜けな声上がる。

「どうか、した？」

華奢が首を傾げて聞いて来たので、零人は両手を前に出していった。

「武器…ないデス」

「ぶき…？」

「エクシールって剣なんだが…おっかしいな。確かここに差してた

筈なんだが…」

ポケットや色々なところをくまなく探すがない。

こんな大事な場面で剣を忘れましたなんて言ったら切腹物だろう。「エクシール…この子の事？」と言うと、華奢は自分の服を少し脱いで、剣の傷跡のような場所を見せる。零人が慌てて目を閉じようとした時、その目を閉じられない事が起きた。

「エ、エクシールっ!？」

華奢の傷跡から出て来た剣のグリップは、まさしくエクシールだった。

彼女が目を閉じてグリップを包み込むように手を浮かべるとグリップが徐々に姿を出していく。青く輝いた光から現れる剣の青は、幻想的にも感じた。

『握れ。我が主よ』

そんな声が頭の中に響いて、気付かない内に手の平はそのグリップを握っていた。

何かが流れ込んで来て、手が震えたが、零人は力を込めるとエクシールを華奢の『中』から引き抜く。そこには、刃があった。青く透き通る刃じゃなくて、それは…銀色に輝いて、零人の姿を鏡のように映していた。

『我が名はエクシール。レイト、貴方の剣だ』

流れてくる声体が突き抜けて行く。それは、体に動きを教えているようでもあった。

『闇を掻き消し、決められた運命の中でもがき続けられる力。それを、貴方に授けよう』

心強い声が聞こえ、体を振るわせる。

「レイトくん…いこう?」

華奢は剣を見詰めている零人の先を走って行く。

「…頼むぜ、エクシール」

零人は呟くと、全力疾走で華奢の後を追う。その足が、羽より軽いような気がしたのは、気のせいじゃないだろう。

第24ページ：：君の夢（後書き）

か、かなり置いてしまった…。

今新作を書いている真つ最中で御座います…（土下座）。

本当に申し訳ございません！

ドンドンペースアップ出来ると良いのですがねw

そんなに文力ないと…。

第25ページ……リイナ激戦

「あれは…エインっ！」

倒れている茶髪の女の子に鎌を振り被った女が斬りかかろうとしている。

それを見た途端、零人は一瞬で華奢の隣を走り抜け、桃色の髪の女との間合いを詰める。

「うおおおおおおおっ！」

声を上げながら桃色髪の女にエクシールの刃を向ける。

さっとそれを素早く避けると、リイナは無表情な顔で零人を見据えた。

「来ましたか」

「喧しいっ！前にお前にやられて腹が立つてるんだ！武器もなんか変わっていやがるし！」

腰を低くして相手の出方を待つ。レイチエルがやっていた事を見よう見まねで真似しようとしているが、動き辛い。

前に会った時は二つの銃を握っていた手に、今度は半透明紫色の鎌を持っている。まるで死刑執行をしようとしている死刑執行人だ。目に悪いし子供が見たら一発で泣いてしまうだろう。普通にしているが零人の腰は少し引いている。

「その少女が…貴方の要ですか」

「んあ？要？」

剣と構えは動かさずに、視線を華奢に移す。

華奢は、零人の背後で小さくなっていった。そりや見た目だけで言えば自分の世界のそこいらに居たギャルより怖いからな。綺麗な顔しているのに鎌を持ってては死神だ。

表情を変えずにリイナが鎌を軽く振ると、少し強い風が吹く。

「……………」

まずくないか？どう考えてもあの鎌から出た風だぞ今の。ちよっ

と振っただけでこれか。

これにやられたのかと視線をエインに向けた瞬間、視線が凍り付いた。

エインの服はリイナが先程した攻撃のせいで、ボロボロになっていた。色々丸見えである。

「…で、出来ればベッドの中で拝みたい…」

男の本音が少し漏れた。

「退屈していた所です。貴方は…わたしの退屈を払ってくれるでしょうか…」

「……あ、ああ、分かった」

エインにどうしても目がいつてしまう。エインの肌は、白く見惚れるほどだ。いつも吊り目で自分を見てくる瞳は閉じられ、まるで御伽の国の眠れる皇女みたいだ。まあ、きっとそれはベレンスの方が合っているだろう。

とにかく、出来れば恥ずかしがりながらベッドの上でその姿を見たかった…。

「——っ！！！」

不意打ちに対応し、強大な衝撃波をエクシールで受け止める。

前髪が靡き、腕の骨に負担が掛かる。ここは闘技場じゃない。きっと、あんな鎌が当たったらさっぱり持っていかれるだろう。その…下半身から。

「不意打ちは…卑怯じゃないかつ？」

「余所見をしている方が…悪いでしょう」

ぎりぎりと鳴る刃と刃。零人の視線が真正面からリイナにぶつかる。

「なんであんた…こんな事してんだ？耳とか見る限り、俺の知っているエルフじゃなさそうだけど…っ？」

本などで出て来るエルフ全て耳が長いと思ったが、間違いなのだろうか？

「…貴様に話すことなど何もないッ」

刃が放され、再び突風が巻き起こる。頬に線が走り、血が流れ出る。

間一髪で振り下ろされた鎌を避け前転しながら距離を取る。エインは、この突風で飛ばされたのか距離は遠い。安全地帯というやつだろう。

しかし、エインの心配をしてる余裕がない事を鈍痛で知る。左腕の二の腕が切れている。もはや見るのも怖くなるほどに血が流れている。

「つつー！」

右腕を力の限り振ると、エクシールの刃の残像が流れ、風を吸収するかのように弾き飛ばす。後ろにいる華奢に危ない目をさせない為だ。

「瀕死状態になるようにしたのですが…力不足ですか」

「うるせえ！！左手が使えなくても右手があるッ！」

リイナとの距離を縮めると零人のエクシールが振るわれる。

素早い動きでそれを交わされると同時に、零人が地面に伏せる。

直感だったか、見事にリイナの鎌が零人の頭上を通り過ぎて行った。疾風が巻き起こるが、リイナの至近距離でその威力はない。

「喰らえッ！」

バシィ。回し蹴りをすると見事に片手で受け止められる。

「まだだ！」

残った脚でリイナの足を払おうと、全力を込めてブンと振るう。

だが、その蹴りが蹴ったのは、何もない空間。次の瞬間には背中に何かが叩き込まれ前めに吹き飛ばされる。

地面に一度当たると、零人の体は重力を無視するように転がり岩にぶつかる。

内臓が全部口から吹き出るような感覚がし、口からはいつの間にか血が出ていた。

「肉弾戦が得意のようですが、力がありません」

ぐっと力を体に込めると上手く開かない右目に気付く。だらんと

垂れ下がった左手が痛々しい。

エクシールの羽のような重量が負担に感じて来る。

「レイトくん……！」

途端に倒れそうになるのを華奢が支えてくれる。危なく意識を失いかけた。

「華奢……」

名前を呼ぶと、その子は目に涙を溜めながらそれを流さないように我慢している表情。不思議だ。泣かせたくない、瀕死の状態ですってしまふ。

「レイトくんを、一人で危ない目になんて合わせない……！」

零人の前に立つと手を広げてリイナに視線を向ける。

「ご要望なら、その要と共に屠って上げましょう……」

「やめろ！華奢ッ！」

思いつ切り目の前に立っている小さい背中を抱き締め、エクシールを前に突き出す。

——気休めなのはわかってる。だけど、力を貸してくれ。エクシール、いや、華奢。君を守る為に、君を守るコトが出来るのは、君が作り出したこの剣だけなんだ。

「力を貸してくれッ……！」

叫ぶ。目の前の子、そしてエインを守る為に。こんなところで死ねない。レイチェルにも笑ってただいまって言わなきゃならない。だから——、

青く、エクシールの輝きが増す。優しいその光は華奢の青い色の髪と同じ色を放っていた。

体の痛みは治まらない。だけど、レイチェルと闘技場で戦った時と同じ感覚が体を包む。手にはグリップが白く輝いたエクシール。手を開くと、青く輝いていたエクシールの刃は白く染まった。

握り直し、正面を見据える。リイナの風の鎌はすぐそこまで迫っていた。華奢が振り返ると、零人の顔を見て微笑む。すると華奢は何もかもわかつているかのように、零人の前から走り出し、後ろに

回る。

「エクシール・ブレイカアアア——！！！！」
右手だけで、エクシールを振り被り、全力で——下ろした。

第25ページ……リイナ激戦（後書き）

遅れを取り戻す！をペースに頑張っているのであります体長！

と、言う訳で待っていた人も待っていた人なかつた人も25話目でございますッ

本当に間を開けてすみません！

只今細々続きを書いております！

なんだかんだで50の半分ですよ！

あとがきまでよんでくれる方、有難うございます！

これからも宜しくお願いいたします！

第26ページ：：振り合う刃

砂埃が立ち込める。そんな中、エインは少しだけ目を開けた。

体中が痛い。まるで全身蹴り殴られたような熱さ。勿論そんな奴がいたら魔法で吹き飛ばすのだが、今は口から言葉を出すのも無理みたい。

力を入れて立ち上がるうとするがそれも無理だ。

「エインッ！」

何かが自分の名前を呼び、抱き抱える。暖かい、そんな想いが頭を満たす。

抱き抱えてきた人物がわたしの背中を腕で守りながら転がる。悪い奴ではないようだ。

その抱擁が解かれると、目の前に目新しい靴が見えた。手には光り輝いている剣を握っている。エクシールと言っていただろうか、あいつは。

「エクシール・ブレイカ！」

頬に風が少し当たる。それも、暖かい。

確か、魔法本を必死に読み漁っていた時書いてあったつけ。伝説の男と、女性が恋というのに堕ちる話。その人が前に立っていてくれるだけで幸せになる。

ね、レイト。アンタを見ると、なんだか暖かくなるの。まあ、腹が立つてくるって言うのもあるんだけど、なんだかそれ以上に…ね。レイチエル様も、こんな気持ちだったのかな？——これが、あいつていうのだったなら良いのかな？あたしは。

「お前！戦えない相手も狙うのか！？」

エインを地面に横たえ、その前に立ち吹いてきた風の突風を粉碎

する。

零人が唇を噛みながら叫ぶとリイナは無表情で、「不要物だったからです」と言う。

「ぬかせええええええ——ッ！！！」

怒りで叫ぶとリイナに向かって走りエクシールを真っ直ぐに突き出す。

「怒りに身を任せるとは、愚かです」

一筋の線を描きながらリイナに出された剣先は、鎌によって止められる。

剣を弾いて距離を取ると振り被り横に薙ぐ。白い線が紫色の鎌に傷をつけようと音を立てる。場に刃と刃がぶつかった音が響いた。

「お前みたいに、何にも表情が変わらない奴にはわかんねえよ！」

力を込めて、リイナの鎌を弾くと追い討ちを掛けようとする。だが、体勢を取り直したリイナが鎌を薙ぎ、風を起こしそれを防ぐ。

「男にはなあ、怒ってでも守らなきゃいけない物があるんだよ！それが、今、エインだって事だ！」

猛攻を続けるが、息が切れていくだけでリイナに致命的な攻撃を与えられない。

力の差が激し過ぎる。

「はは……ここまでだと、逆に笑えて来るな……」

左手を庇う間もなく、リイナの鎌の刃が迫り、今度はそれを受け返すが続いている。力でさえ負けている自分が勝てる隙があるのかと考える。

リイナの武器、紫色の鎌は重さを無視している速度で振るわれている。見切るので精一杯だ。エクシールの刃が鋼になったからってレベルアップした訳ではなさそうだ。自分の体力を頼るしかない。諦めるのは、倒れてからにしよう。

風圧で遂に体が吹き飛んだが、エクシールを地面に叩き付けるように使い、一回回転をして、押し留める。

「エクシール・ブレイカアアア——！！！！」

追撃にきた爆風を、後ろのエインと華奢を庇う為に弾き飛ばす。くらつと来たのは、貧血のせいだろうか。左手からの血が止まらない。倒れていないのが自分でも不思議なくらいだ。

「はあ……はあ、はあ……」

避け際に跳んだ石がぶつかったのか、左目が開かなくなっている。どうやら感覚が麻痺してきているみたいだ。

「レイトン…くん」

「まだだ！！まだ終わっちゃいない！！」

精一杯の声を絞り出し、叫ぶ。風で舞い起きた砂嵐でリイナの姿は見えないが、息も切らしていないだろう。どうする。力だ、力がなきゃ補えない差がある。

「頑張れ俺：頑張れ俺」

エクシールを構えながら目を閉じ、想像する。

もつとだ。光を、あの鎌に対抗出来るくらいの光を。強さを、形を。創り出せ。時間がない。早く…早くッ！

「これで、終わりです——」

もつとだ。もつと光を。エクシール、形を……刃を……、ガバツと背中に抱き着かれる衝動。か弱い力で、俺の背中に飛び付いている。

「『鳴り渡れ！我が正義！』」

レイチェルの声と、あの時の光景が頭を過ぎった瞬間、俺は声に出していた。

彼女の輝く剣を、俺にも創れたら良いなと。想像した。

「エクス・カリバアアア——！！！！！！！」

リイナが構え、振るった鎌と、エクシールが衝突する。
はつきりと、紫と白の光が交差する。右手が痺れ、エクシールが吹き飛びそうになるが、手を力の限り握り締める。

俺に、守りたい者を守れる光をくれ。

[illegible]

く。

耳に来る音がけたたましく鳴ると、目の前を紫色のガラスの破片のような物が通り過ぎて行く。啞然としたリイナの姿が見えた零人は、エクシールを続けて振り被る。

「終わりだッ！」

リイナの持っていた鎌の持ち手を、半分に切り裂く。光は残像を残しながら、舞い消えた。

「そんな…克蘭ベルスが…消えた…？」

息を切らして剣を支えにしている零人の耳には聞こえない声で呟いている。

華奢はふらつく零人を支えると、舞う光達に手を翳し、笑顔になる。

「大丈夫、この人なら、やってくれるよ」

そう言つと、紫の光と白の光は、回って遊んでいるかのように、空に薄れていった。

零人は意識を手放さないようにエクシールを引き摺りながらリイナの傍に寄る。啞然としたその瞳は、少しだけ人間の色を取り戻していた。

「わたしが…克蘭ベルスが負ける筈がない…消えるなんて事は…」

「あるんだよ、俺が消したの見ただろうが…ッ」

エクシールをリイナの目の前に突き刺すと、最後の力を振り絞つて言う。

「俺が、勝ったんだッ！」

第26ページ：：振り合う刃（後書き）

遅れて申し訳ありません、テストがありますので。
高校になれるのって大変ですね、はい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8295b/>

君の世界を守るコト -The Justice Sword Destiny-

2010年10月8日16時12分発行